

# 佐倉市羽鳥外海道遺跡

— 佐倉・羽鳥地先安定給水連絡管工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

平成15年3月

千葉県企業庁  
財団法人 千葉県文化財センター

さくらはとりそとかいどう  
**佐倉市羽鳥外海道遺跡**

— 佐倉・羽鳥地先安定給水連絡管工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 —



## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第441集として、千葉県企業庁の工業用水管布設工事事業に伴って実施した佐倉市羽鳥外海道遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、弥生時代の竪穴住居跡や、歴史時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡が発掘されるなど、この地域の原始・古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また埋蔵文化財の保護のために広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成15年3月25日

財団法人千葉県文化財センター

理 事 長 清 水 新 次

## 凡　　例

- 1 本書は千葉県企業庁による佐倉・羽鳥地先安定給水連絡管布設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は千葉県佐倉市羽鳥957-3ほかに所在する羽鳥外海道遺跡（遺跡コード212-041）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県企業庁の委託を受け、財團法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査は主任技師落合章雄（平成10）、整理作業は主席研究員雨宮龍太郎（平成14）が下記の期間に実施した。
  - 発掘調査 平成10年9月1日～平成10年9月30日
  - 整理作業 平成14年7月1日～平成14年9月30日
- 5 本書の執筆は、主席研究員雨宮龍太郎が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化財課（旧文化課）、千葉県企業庁、佐倉市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
  - 第2図 佐倉市役所発行 1/2,500基本図「IX-L E 08-3」・「IX-L E 18-1」
  - 第3図 国土地理院発行 1/25,000地形図「佐倉」(N-54-19-14-2)
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。なお、測量値は日本測地系を位用している。

## 本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 経緯と経過.....	1
2 調査方法.....	1
3 調査日誌抄.....	1
第2節 遺跡の立地と歴史的環境.....	1
1 遺跡の立地.....	1
2 歴史的環境.....	4
第2章 遺構と遺物.....	10
第1節 遺跡の概要.....	10
第2節 旧石器時代.....	10
第3節 壴穴住居跡.....	10
第4節 挖立柱建物跡.....	24
第5節 陥し穴.....	24
第6節 土坑.....	29
第7節 グリッド出土遺物.....	34
第3章 まとめ.....	35
報告書抄録.....	卷末

## 挿図目次

第1図 調査範囲グリッド展開図.....	2	第13図 0 0 5 遺構実測図.....	21
第2図 遺跡周辺地形図.....	4	第14図 0 0 5 遺物構実測図.....	22
第3図 周辺の主要遺跡.....	6	第15図 0 1 3 遺構・遺物実測図.....	23
第4図 遺構配置図.....	11	第16図 0 0 6 遺構実測図.....	25
第5図 旧石器時代遺物出土地点・遺物実測図.....	12	第17図 0 1 6 遺構・遺物実測図.....	26
第6図 0 0 1 遺構実測図(1).....	13	第18図 0 0 8 遺構実測図.....	27
第7図 0 0 1 遺構実測図(2).....	14	第19図 0 0 9 · 0 1 0 遺構実測図.....	28
第8図 0 0 1 遺物実測図.....	14	第20図 土坑実測図(1).....	30
第9図 0 0 2 遺構実測図.....	16	第21図 土坑実測図(2).....	31
第10図 0 0 3 遺構・遺物実測図.....	16	第22図 土坑出土遺物実測図.....	32
第11図 0 0 4 遺構実測図.....	18	第23図 グリッド出土遺物実測図.....	32
第12図 0 0 4 遺物実測図.....	19		

## 図版目次

- |                        |                         |
|------------------------|-------------------------|
| 図版1 遺跡全景               | 図版6 土器（001・003・004）     |
| 図版2 001・001竈・001勾玉出土状況 | 図版7 土器（004・005）         |
| 図版3 002・003・004        | 図版8 土器（013・016・014・015） |
| 図版4 005・013・006        | 図版9 土器（015・グリッド）、石器類    |
| 図版5 008・009・010        |                         |

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 経緯と経過

千葉県企業庁は、佐倉・羽鳥地先安定給水連絡管工事事業の実施に当たり、千葉県教育委員会に対して、計画予定地内に所在する埋蔵文化財の有無について照会を行った。現地踏査の結果、羽鳥外海道遺跡の範囲内であることが確認された。このため、県教育文化財課（旧文化課）は、県企業庁千葉工業用水道事務所と埋蔵文化財の取扱いについて協議し、記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

羽鳥外海道遺跡の調査は、調査面積300m<sup>2</sup>で、平成10年9月1日から9月30日にわたって実施された。上層・下層ともに確認調査を行った結果、上層は攪乱が多く、遺構が検出されなかった北部を除く230m<sup>2</sup>が本調査の対象となり、下層は確認グリッドから旧石器時代石器剥片が1点出土し、周囲を拡張調査したが、それ以上遺物が検出されなかったので、確認調査で終了した。

### 2 調査方法（第1図）

調査範囲には、全体をカバーする範囲で、公共座標に基づき40mピッチの正方形大グリッドを設定し、それを4m×4mの小グリッドに100分割して、調査範囲内の要所に小グリッド基準杭を打ち込んだ。トレンチやグリッドの設定、遺物出土地点や遺構の位置表示は、すべてそれらの基準点を利用している。

確認調査は、上層は小面積なので、バックホウを使用して表土を全面排除した。下層確認調査は、上層本調査終了後に、2m×2mの確認グリッドを調査範囲内になるべく均等に7か所設定して実施した。ローム層の掘削にはクラムシェルを使用して、その排土をジョレンで精査して遺物を探査した。

本調査は、既述のように上層は230m<sup>2</sup>の範囲を、ジョレンや移植ゴテを用いた人力作業で発掘精査した。下層の拡張調査は、ローム層上面をバックホウで掘削した後に、ジョレンによる人力作業で発掘精査した。

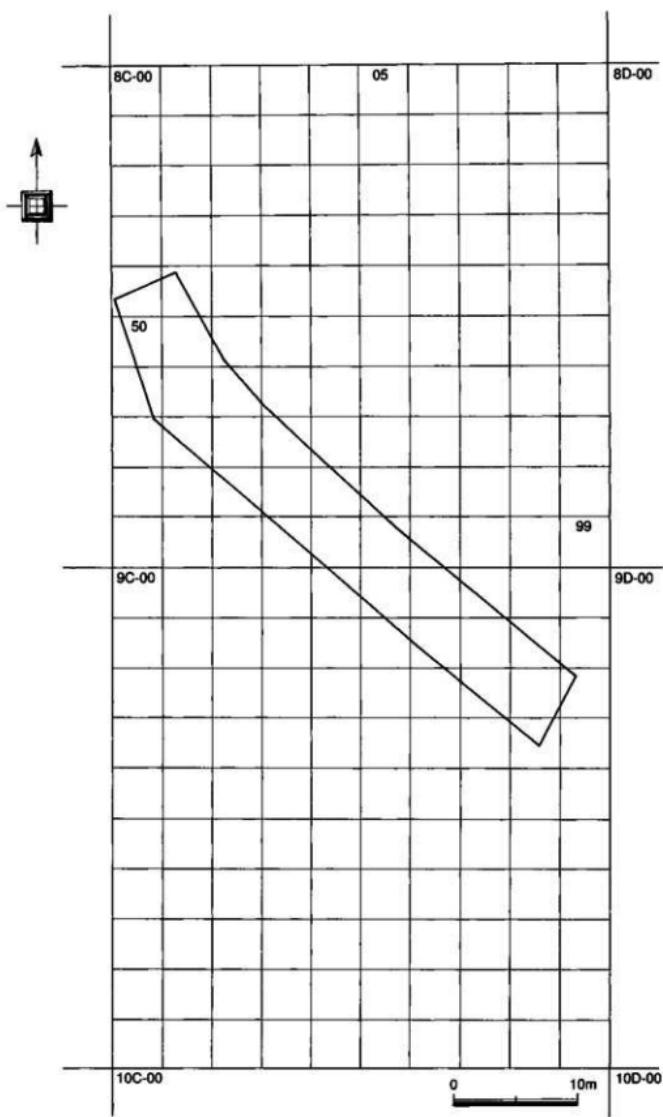
### 3 調査日誌抄

9月1日 曇り	調査開始—テント設営、測量杭打ち込み
9月3日 曇り後晴れ	バックホウ搬入、表土除去、遺構検出
9月9日 晴れ	遺構精査開始
9月24日 曇り	空中撮影実施
9月25日 晴れ	下層確認グリッド着手
9月30日 曇り	調査終了、撤収

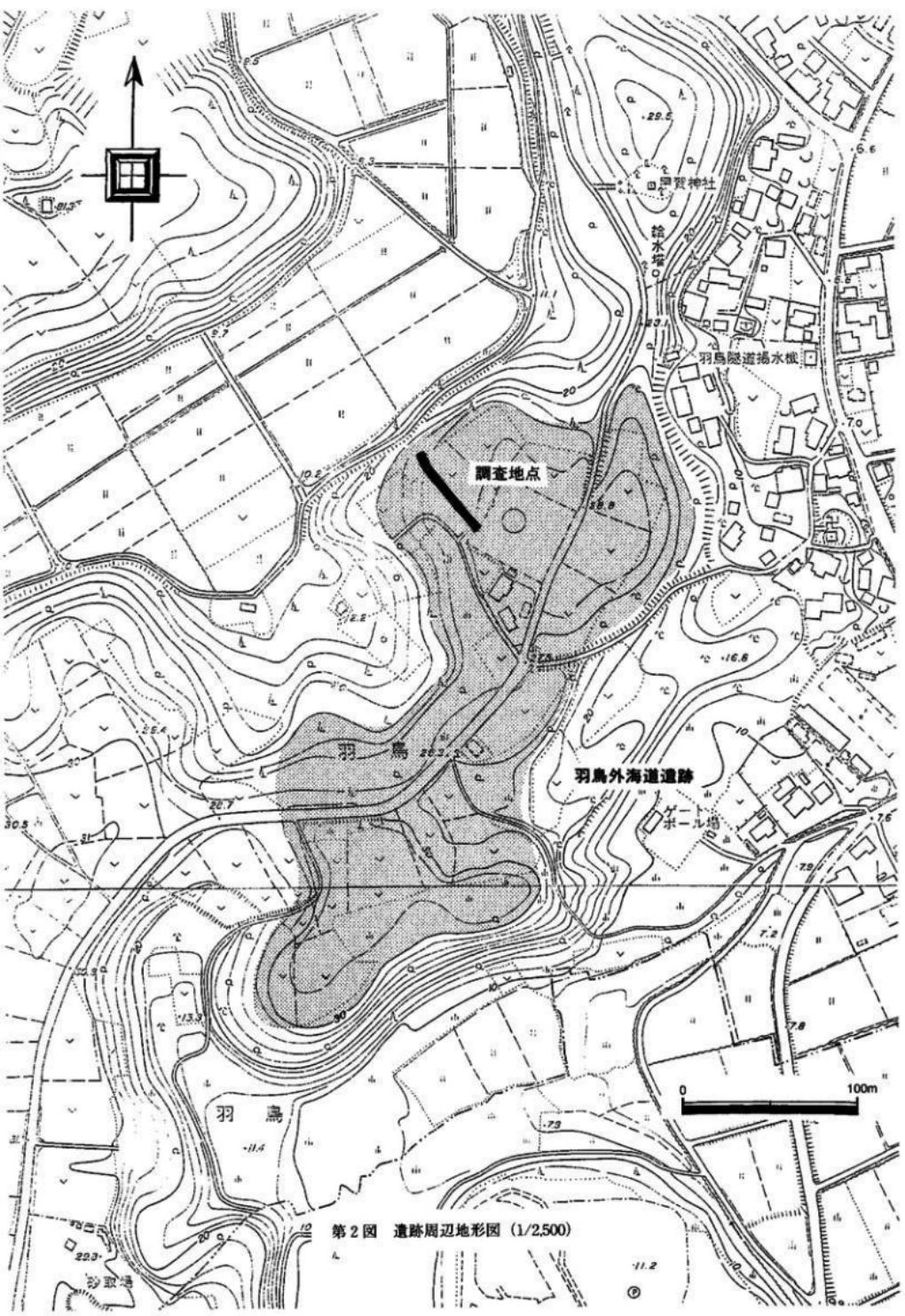
## 第2節 遺跡の立地と歴史的環境

### 1 遺跡の立地（第2図）

羽鳥外海道遺跡は佐倉市羽鳥957-3ほかに所在する。広大な下総台地の中央部、印旛沼のほぼ真南方向に約3.8kmの地点に立地する。印旛沼南岸には、東に鹿島川、西に手縫川が流入し、その沿岸には沖積低地が形成され、豊かな水田地帯になっている。両河川に挟まれた中央部は、下総地方に特有な舌状台地で、



第1図 調査範囲グリッド展開図



第2図 遺跡周辺地形図 (1/2,500)

印旛沼に面した末端部は標高10m前後と低平だが、基部付近の千代田団地周辺では標高25mとなり、内陸部が高い北低南高の地形を呈している。この台地は、生谷・吉見付近の中央部で狭くくびれており、そこを境にして、印旛沼沿岸に突出する北部と、下総台地本体に接する南部とに区分することができる。この違いは、両地域の遺跡の様相にも反映しているかもしれない。台地上は久しく山林や畠として土地利用されてきたが、近年は佐倉市域では王子台・江原台・染井野地区、四街道市域では千代田地区・池花地区といった大規模住宅団地が相次いで造成され、急速に都市化の度合いを増している。

遺跡はこの舌状台地の東側、すなわち鹿島川寄りに半島状に突き出した、小台地地形の付け根部分に占地している。この小台地の麓には、南北に長い羽鳥集落が存在する。遺跡範囲は台地の標高約22m以上の高燥で平坦な尾根上に展開し、最高所で標高約31m、面積約40,000m<sup>2</sup>の広さである。現状は山林と畠が混在している。

遺跡はすでに周知されており、縄文時代の稻荷台式土器・加曾利E式土器、また古墳時代や平安時代の土陶器や須恵器が地表面に散布している。

今回の発掘調査は、遺跡の北西部の路線調査である。この付近は台地が北西へ張り出し、南西から谷が深く入り込んでいる。周辺の地形は、東から西へ緩やかに傾斜し、調査範囲の西端付近から断崖になっている。

## 2 歴史的環境（第3図）

遺跡周辺は下総地方でも、有数の遺跡密集地域である。遺跡の年代は旧石器時代から近世まで満遍なく存在するが、縄文時代と弥生時代の遺跡がとくに卓越している。縄文時代は草創期から晚期にわたり、弥生時代は印手式と呼ばれる、この地域独自の後期土器が広く散布している。総じて下総地方では、縄文時代や古墳時代に比べて、弥生時代の遺跡は数において見劣りがするが、この地域の弥生時代遺跡の豊富さは特筆に値する。では、この地域の主要遺跡を時代順に紹介していこう。

旧石器時代の調査は、佐倉市域と四街道市域では精粗のばらつきがあり、後者において大規模遺跡が精査されている。内黒田遺跡群（10）は、大割遺跡・池花遺跡・池花南遺跡という隣接3遺跡から構成されるが、旧石器時代文化層が都合13枚、約70ブロックが検出された。なかでも池花南遺跡では、IXc層から環状ユニットが、IV層から竪穴造構が発見された。石器の種類は、石核・ナイフ形石器・削器・尖頭器・石斧・石刃・細石核・細石刃等が出土した（1）。御山遺跡（9）では9枚の文化層、26ブロックが検出された。ここでも、X層から環状ユニットが発見されている。石器には石核・大型石刃・ナイフ形石器・尖頭器・楔形石器等が出土した（2）。小屋ノ内遺跡（8）は40ブロック以上が調査され、局部磨製石斧・削器等が出土している（3）。白井南（神石第I地点）遺跡（2）ではⅢ層から2ブロック検出され、楕円形石器・石核等が出土した（4）。また、同（神石第III地点）遺跡（3）では、竪穴住居跡の覆土中からナイフ形石器が発見された（5）。吉見台遺跡（5）からは削器等が出土した（6）。生谷古新山南遺跡（4）では尖頭器が出土した（7）。また、大篠塚遺跡（7）からもⅢ層のブロックから尖頭器等が発見された（8）。間野台貝塚（13）では1ブロックから、彫刻刀形石器・細石刃・石核・搔器等が発見された。（9）後口遺跡（11）ではナイフ形石器・有舌尖頭器等が出土した（10）。畦田川崎東遺跡（1）では細石刃核が出土し、飯重新畠遺跡（6）でも細石刃核が発見された（11）。

縄文時代の遺跡はきわめて多く、台地上の至るところに所在する。初期の遺跡から例挙する。羽鳥外海道遺跡では稻荷台式土器が出土した。吉見中ノ比余遺跡（17）では撲糸文系土器が出土した（12）。池下

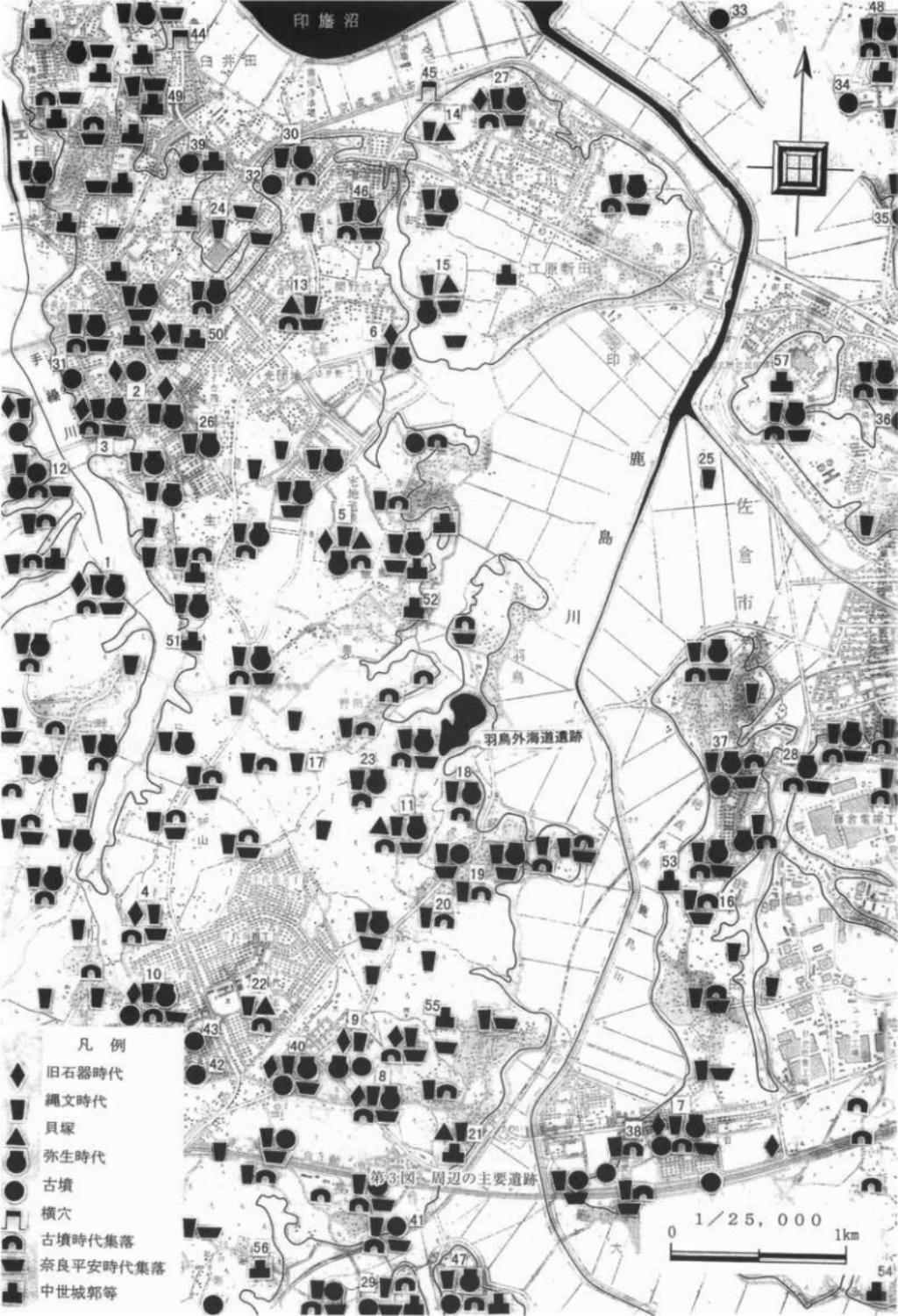
遺跡（18）では稲荷台式土器が出土した（13）。後口遺跡（11）では井草式・夏島式土器が出土した。鎌治内遺跡（19）では夏島・稲荷台式土器が出土した。寺向遺跡（20）からも夏島・稲荷台式土器が出土した。内黒田遺跡（10）では撻糸文系土器が出土した（1）。内山遺跡（23）では夏島式土器が出土した。縄文時代には貝塚が形成されるが、当地域も少なくはない。最古の貝塚は後口遺跡（11）の地点貝塚で、早期後半に出現する（10）。前期になると、間野台貝塚（13）・曲輪ノ内貝塚（15）等の地点貝塚が形成される（14）（15）。中・後期の貝塚としては、馬場No.2遺跡（21）の地点貝塚が知られている。後・晚期には吉見台貝塚（5）と八木原貝塚（22）が現れる。吉見台貝塚では長軸19m・短軸16.5mの大型住居跡が検出されたほか、各種土偶・特殊土器・石棒・石劍・独鉛石等が出土した（6）。また、八木原貝塚からも土偶・耳飾・土版等が伴出している（16）。また、貝塚は伴わないものの、飯合作遺跡（12）ではこの時期の土偶・耳飾・土製円盤等が出土した（17）。御山遺跡（9）では土坑から連珠状になった臼玉が発見された（2）。このほか、遠部台遺跡（14）には時期不詳の地点貝塚が所在する。特殊な遺物としては、太田用替遺跡（16）から翡翠製大珠が出土している（18）。縄文時代終末期に入つても、遺跡が連続と形成されている。吉見台遺跡（5）では大洞・荒海式土器が出土した（6）。大崎台遺跡（28）からは千網・荒海式土器が出土した（19）。後口遺跡では大洞A式土器が採集された（10）。御山遺跡（9）では荒海式土器が出土した（2）。内黒田遺跡群（10）からは千網・荒海式土器が出土した（1）。縄文時代の環境や交通手段を考える上で好適な資料に独木舟がある。独木舟は東絶地方から比較的多く発見されるが、当地域においても、白井（24）と寺崎（25）の低湿地から、その出土が報じられている。

当地域の特徴の一つとして、弥生時代遺跡の豊富さがあげられる。その初期の遺跡から紹介する。御山遺跡（9）や内黒田遺跡群（10）からは須和田式土器やさらに古い土器が出土した（2）（1）。生谷A地区遺跡（26）からは壺棺が出土したと伝えられる。弥生時代に本格的な集落が形成され始めるのは中期末からで、大崎台遺跡（28）では環濠集落が成立し（19）、相ノ谷遺跡（29）でも集落跡が出現する（8）。この時期の墓制としては、臼井屋敷跡遺跡（58）の方形周溝墓群が知られている（20）。後期には遺跡数が増大し、大崎台遺跡をはじめ、飯合作遺跡（12）や江原台遺跡（27）等の大規模集落が形成される（17）（21）。また、大崎台遺跡や飯合作遺跡に見られるように、方形周溝墓の普及が著しい。

古墳時代に入ると、当地域は印旛のクニの一画を占め、後期には印旛国造によって支配された。当地域には、大規模古墳が所在せず、後期古墳が圧倒的に多い。県指定史跡の飯合作古墳群（12）はそうした中では異色の前期古墳である。前方後方墳2基・方墳2基からなり、前方後方形の1号墳は木棺直葬で、ガラス玉・銅鏡・底部穿孔壺型土器を出土した（17）。その後に続く古式古墳としては、石神古墳群中の石神2号墳（31）と光勝寺瓢箪塚古墳（32）がある。石神2号墳は円墳で、木棺直葬、直刀・鐵鏡・刀子を出土した（4）。光勝寺瓢箪塚古墳は径12mの円墳で、石枕を出土した。主要な前方後円墳には以下のようなものがある。山崎ひょうたん塚古墳（35）は長軸40mで、市指定史跡になっている。大篠塚2号墳（38）は長軸30mの規模で、箱式石棺・銀環・直刀・刀子・鐵鏡・耳環を出土した（22）。並木1号墳（36）は長軸13mの小形前方後円墳である。また、寺崎向原遺跡には前方部の短小な帆立貝形墳が所在した（23）。後期になると、小規模な群集墳が各所に形成される。石神古墳群（31）は前方後円墳1基・円墳2基・方墳2基から構成される（4）。萩山古墳群（33）は円墳24基からなり、11号墳は箱式石棺で、人骨・直刀・鐵鏡が出土した（24）。岩名古墳群（34）は4基の円墳からなる（25）。御山遺跡（9）では円墳7基・方墳13基が調査された。主体部は板石箱式石棺で、このうち、SX-015からは金銅装大刀・

印旛沼

48



凡 例

- ◆ 旧石器時代
- 繩文時代
- ▲ 貝塚
- 弥生時代
- 古墳
- ◆ 古墳時代集落
- 奈良平安時代集落
- ▲ 中世城郭等

0 1 / 25, 000 1km

玉類が出土し、多人数埋葬が行われていた（32）。内黒田遺跡群（10）には帆立貝形埴1基・円埴12基が所在した。主体部は木棺直葬と軟質砂岩箱式石棺で、直刀・鉄鎌等が出土した（1）。物井古墳群（40）では調査された1号墳は、板式箱式石棺から直刀・鉄鎌・琥珀玉等が出土し、十数体分の人骨が埋葬されていた（26）。千代田古墳群（41）は十数基の円埴群で、木棺直葬や板石箱式石棺の主体部から、刀子・鉄鎌等が出土している（27）。また、入ノ台古墳群（42）は10基の古墳で構成される（28）。池花古墳群（43）は帆立貝形埴1基・円埴12基で構成される。確認できた主体部は軟質砂岩製箱式石棺で、鉄鎌・玉類等が出土した（1）。最後に、特殊な墓制として横穴墓がある。横穴墓は南紀地方から太平洋岸を北上して、香取の入り江に進出し、南岸に遺跡を残しながら常陸川（現利根川）を廻遊している。当地域はその西限にある。白井戸横穴群（44）は2基からなり、直刀・人骨が発見された。白井田遠部台横穴群（45）は2基からなる。

古墳時代の集落跡は、多数の遺跡が知られ、調査も実施されている。ここでは、特色ある石製模造品製作工房跡と大規模集落跡に注目する。白井田小笠台遺跡（30）は数回の部分的調査からいざれも5世紀代の竪穴住居跡が検出され、剣形・有孔円盤・勾玉等の石製模造品が出土した。その中には未完成や剥片が伴出している（29）。西向井遺跡（47）は同様な遺物を出土し、工房跡とみられる（8）。ほかに畦田川崎東遺跡（1）が知られている。希少な初期の大規模集落として、46軒が検出された4世紀代の飯合作遺跡（12）がある（17）。小屋ノ内遺跡（8）からは約30軒が報告されている（3）。6・7世紀代には、大規模集落が発展し、遺跡数も軒数も増大する。古屋敷遺跡（46）では25軒（30）、江原台遺跡（27）では31軒（21）、入ノ台第2遺跡（42）では80軒（30）検出された。

下総国が成立する奈良・平安時代の遺跡は集落跡が中心となる。大規模集落としては、小屋ノ内遺跡（8）は約220軒を数え（3）、江原台遺跡（27）では133軒が報じられている（21）。入ノ台第2遺跡（42）でも23軒検出された（30）。特殊な遺物も出土している。岩名姿山遺跡（48）からは「山万呂」銘の墨書き土器が発見された（31）。白井田小笠台遺跡（30）からは三彩托が出土した（29）。

中世には千葉氏支族の白井氏膝下の地となり、城郭が多数築造された。白井城本城遺跡（49）は白井氏の本拠で、千葉氏が本拠倉城に据った際の西の要衝となつた。3郭構造で、各郭は土塁を伴う空堀によって区画され、斜面には腰曲輪が取り付いている。土橋・虎口・櫓台等の施設が付属する（32）。王子台砦跡（50）は一名謙信・夜城とも呼ばれ、上杉謙信が白井城を攻めた際、一夜にして築かれたという伝承を持っている。単郭で、土塁を伴う空堀をめぐらし、土橋・虎口・櫓台等が付属する。生谷砦跡（51）は単郭構造で、周囲に土塁を伴う空堀を穿ち、腰曲輪を付設する。吉見城跡（52）は複郭で、二重土塁を伴う空堀に、腰曲輪が付設する。太田砦跡（53）は単郭で、土塁を伴う空堀で区画し、腰曲輪を造成する。土橋・櫓台等が付属する。小篠塚城跡（54）は多角方形構造の郭に、腰曲輪が取り付き、土塁を伴う空堀で区画する。虎口が付属する。古屋城跡（55）は単郭に腰曲輪が取り付き、二重土塁を伴う空堀で区画する。館山館跡（21）は単郭に腰曲輪を付設する。大山砦跡（56）は単郭で腰曲輪が取り付き、土塁・土橋・虎口・櫓台等が付属する。佐倉城跡（57）は近世堀田氏の遺構で、天守閣・二の丸に水堀・空堀をめぐらし、要所に腰曲輪を設置する。一の門・台所門や付随する馬出し遺構・銅櫓等が発掘された。

羽鳥外海道遺跡の南には、後口遺跡（11）・池下遺跡（18）・内山遺跡（23）など、縄文時代早期の資料を出土した諸遺跡が展開する。同一台地上に隣接する本遺跡からも稲荷台式土器が採集されており、

この一帯が同期の大規模遺跡となる可能性が高い。しかし、これらの遺跡からは、弥生・古墳・奈良平安時代にわたる遺構も検出されている。したがって、羽島外海道遺跡の性格は、縄文時代早期を含む様々な時代を包含した、複合的な遺跡であると予察できよう。

## 参考文献

- 1) 渡辺修一1991「四街道市内黒田遺跡群－内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書－」(財)千葉県文化財センター
- 2) 渡辺修一ほか1994「四街道市御山遺跡【四街道市御山遺跡(1)－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書I】」(財)千葉県文化財センター
- 3) 千葉県生涯学習部文化課1980・1989～94『昭和55年度・平成1～6年度千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』
- 4) 熊野正也ほか1975「臼井南－千葉県佐倉市臼井南遺跡調査報告書－」佐倉市教育委員会ほか
- 5) 熊野正也ほか1976「臼井南－石神第Ⅲ地点発掘調査報告書－」臼井駅南土地区画整理組合
- 6) 林田利之1999「千葉県佐倉市吉見台遺跡A地点－縄文時代後・晩期を主体とする集落跡と貝塚の調査－」(財)印旛都市文化財センター
- 7) 千葉県生涯学習部文化課1994『平成6年度千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』
- 8) 田川良ほか1982「北総線－東京電力北総線設置工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－」東京電力北総線遺跡調査会
- 9) 小倉和重1999「千葉県佐倉市間野台貝塚(第2次)－東京電力株式会社臼井変電所新設事業に伴う埋蔵文化財調査－」(財)印旛都市文化財センター
- 10) 四街道町教育委員会1989「四街道市内遺跡群発掘調査報告」
- 11) 桑原謙ほか1974「飯重－佐倉市教育委員会ほか
- 12) 佐倉市教育委員会1987「昭和61年度佐倉市埋蔵文化財緊急調査報告」
- 13) 四街道町教育委員会1975「町内の遺跡－亀崎・米山遺跡－」
- 14) 喜多裕明1996「千葉県佐倉市間野台貝塚－不特定遺跡(間野台貝塚)発掘調査－」佐倉市教育委員会ほか
- 15) 有沢要ほか1990「平成元年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書－臼井田小笠台遺跡・曲輪ノ内遺跡－」佐倉市教育委員会
- 16) 米内邦雄1978「八木原貝塚調査報告書」四街道遺跡調査会
- 17) 沼澤豊1978「佐倉市飯合作遺跡」(財)千葉県文化財センター
- 18) 佐倉考古サークル1986「うつ和」
- 19) 柿沼修平ほか1984「大崎台遺跡発掘調査概報」佐倉市大崎台B地区遺跡調査会
- 20) 林田利之1996「千葉県佐倉市臼井屋敷跡遺跡－市道I-32号線(吉見工区)埋蔵文化財調査委託－」(財)印旛都市文化財センター
- 21) 高田博1977「佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書I－第1次・第2次調査－」千葉県教育委員会ほか  
海野道義ほか「江原台－土地区画整理事業に伴う千葉県佐倉市江原台第1遺跡II区の発掘調査報告書－」

- 22) 日本文化財研究所1978『太田・大塚塚』
- 23) 佐倉市寺崎遺跡群調査会1987『寺崎遺跡群発掘調査報告書』
- 24) 千葉県生涯学習部文化課1981『昭和56年度千葉県埋蔵文化財発掘抄報』
- 25) 千葉県生涯学習部文化課1973『昭和48年度千葉県埋蔵文化財発掘抄報』
- 26) 星龍象ほか1982『千葉県四街道市物井1号墳』四街道市教育委員会ほか
- 27) 八幡一郎ほか1972『千代田遺跡』四街道千代田遺跡調査会  
米内邦雄1977『千代田遺跡発掘調査概報』四街道遺跡調査会
- 田川良1989『四街道市千代田12号墳発掘調査報告書』四街道市教育委員会
- 28) 千葉県生涯学習部文化課1980『昭和55年度千葉県埋蔵文化財発掘抄報』
- 29) 有沢要ほか1990『平成元年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書－臼井田小笠台遺跡・曲輪ノ内遺跡－』  
佐倉市教育委員会  
中山俊之1991『千葉県佐倉市臼井田小笠台遺跡－ファーストリアルエステート用地内埋蔵文化財調査－』(財)印旛都市文化財センター
- 野村優子1994『千葉県佐倉市臼井田小笠台遺跡発掘調査報告書－ファースト用地内埋蔵文化財調査－』  
(財)印旛都市文化財センター
- 30) 新井和之ほか1990『千葉県四街道市入ノ台第2遺跡発掘調査報告書』四街道市教育委員会
- 31) 千葉県生涯学習部文化課1972・73『昭和47・48年度千葉県埋蔵文化財発掘抄報』
- 32) 柴田龍司1984『臼井城跡発掘調査報告書』佐倉市教育委員会  
※そのほかの各遺跡の事実記載は、千葉県教育委員会1997『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区（改訂版）－』に挾る。

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 遺跡の概要 (第4図、図版1)

調査範囲の現状は畠地であり、南東部で標高27.80m、北西部で26.40mを測り、1.40mの比高がある。表土上には小土器片が多数散乱している。表土下25cmで関東ローム層に達する。ローム層上面は、ゴボウ栽培のトレッシャーによって縱横に搅乱されていた。調査範囲は北部に農業用水道ほかの擾乱が集中しており、上層部調査範囲から除外された。発掘調査の結果、旧石器時代石器1点と竪穴住居跡6軒・掘立柱建物跡1棟・陥穴3基・土坑5基が検出された。

### 第2節 旧石器時代 (第5図、図版9)

調査範囲のはば中央部に設定した確認グリッドから、旧石器時代石器が1点出土した。グリッド周辺を拡張調査したが、それ以上の遺物は検出されなかったので、確認調査の段階で調査を終了した。遺物の出土層位はIX a層である。周辺の関東ローム層立川ロームの層序は、下記のとおりである。

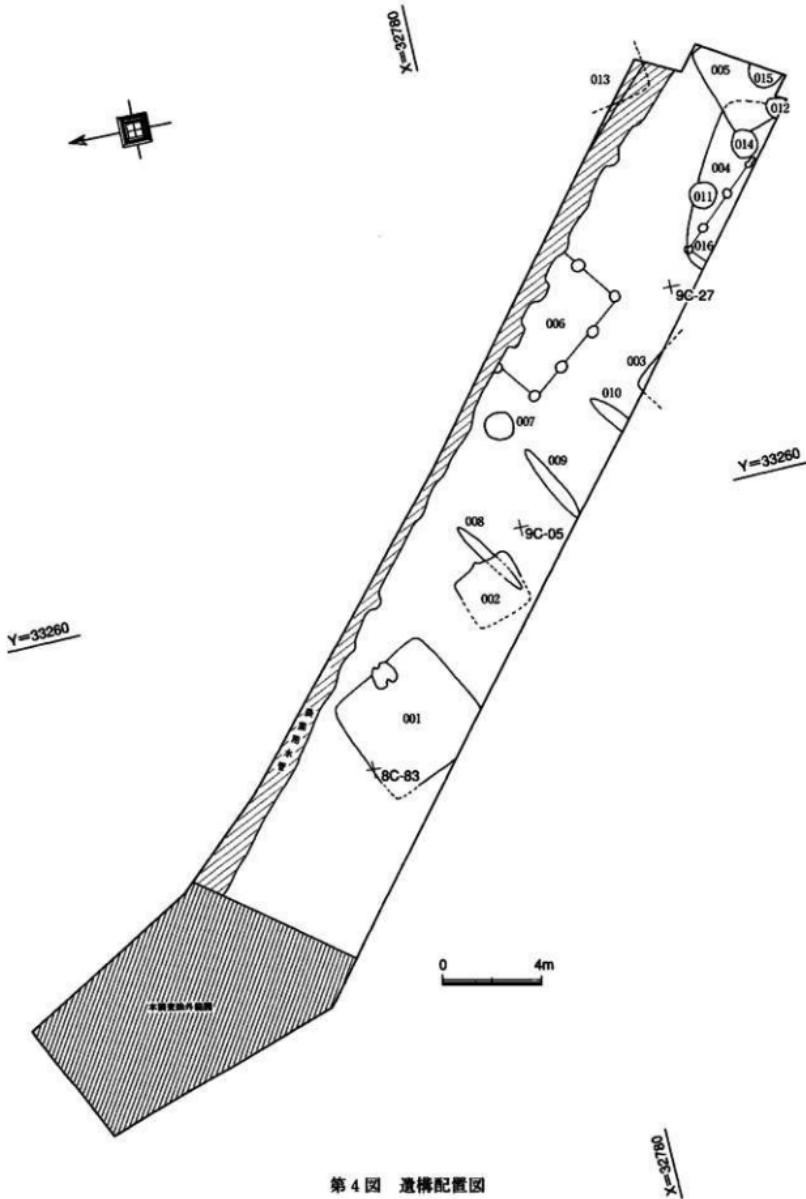
- III層 橙褐色土層 ソフトローム層、調査範囲はこの層まで削平される場合が多く、クラックがからうじて観察できる。
- VI層 橙褐色土層 ハードローム層、ATバミスが拡散して混在する。バミスの含有量は少なく、ブロック状になることはない。
- VII層 暗褐色土層 第2黒色帯上部、VI層との色調の差は明瞭だが、以下の第2黒色帯の各層とは色調による差はほとんどみられない。微量のスコリア・バミスを含む。
- VIII層 褐色土層 第2黒色帯上部間層帯、VII層とIX a層の間に部分的にみられる。
- IX a層 暗褐色土層 第2黒色帯中位、色調はVII層とほとんど変わらないが、ややしまりがある。スコリア・バミスは粒子が大きくなる (1mm~3mm)。
- IX b層 褐色土層 第2黒色帯下部間層帯、IX a層とIX c層との間にブロック状にみられる。
- IX c層 暗褐色土層 第2黒色帯最下層、第2黒色帯の中で最も色調が暗い。スコリア・バミスは3mm~5mmとより大きくなる。下面の波状帶は明瞭である。
- X層 褐色土層 スコリア・バミスが激減する。しまりはほとんど変化していない。立川ロームと武藏野ロームの境界は、視覚的には分層不能である。

遺物 1は黒曜石製の使用痕を有する縦長剥片である。上半部は欠損しており、石刃の可能性も考えられる。縁部は鋭利で、刃こぼれが観察できる。石材は淡黒色、半透明で、径1mm~2mmの不純物を含んでいる。栃木県高原山産と考えられる。重量2.7gを量る。

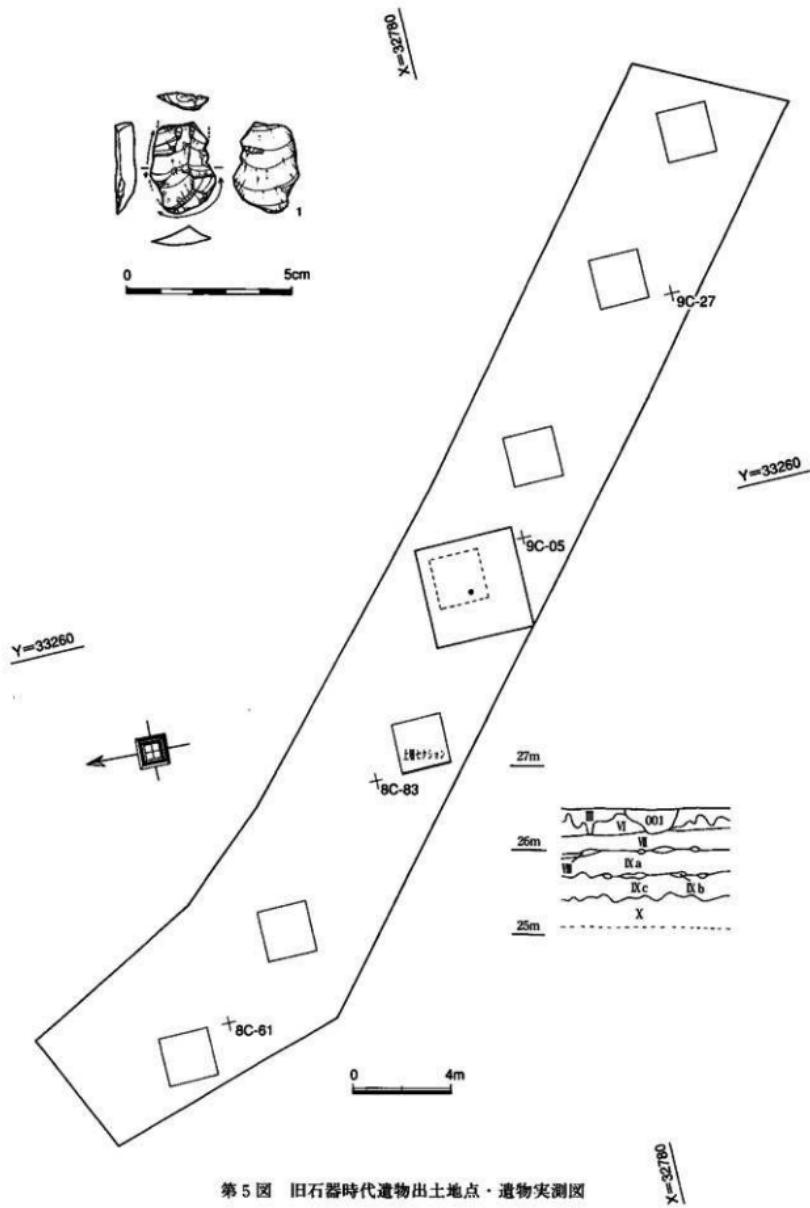
### 第3節 竪穴住居跡

001 (第6~8図、図版2・6・9)

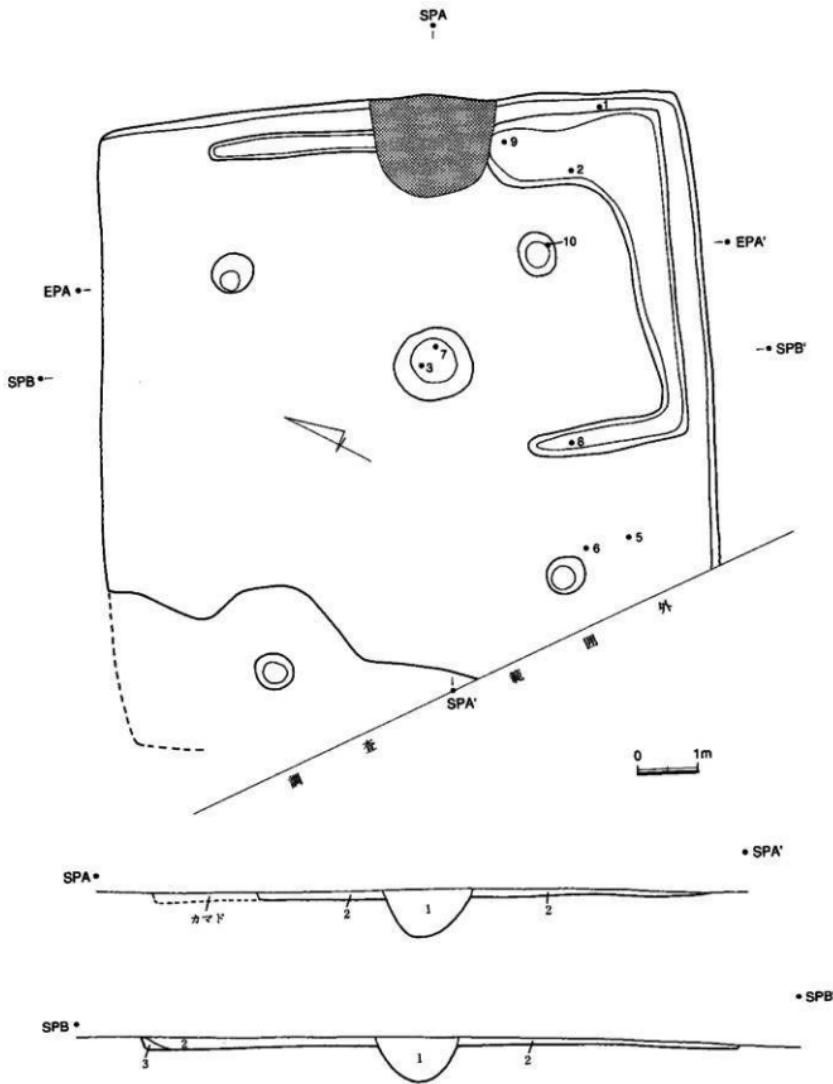
遺構 調査範囲の中央付近に位置し、北東壁に竈を備えている。南の一角が調査範囲外に出ている。遺構確認面から床面までの深さは10cm前後と浅く、西の一角は床面がすでに削平されていた。竈側の一辺は



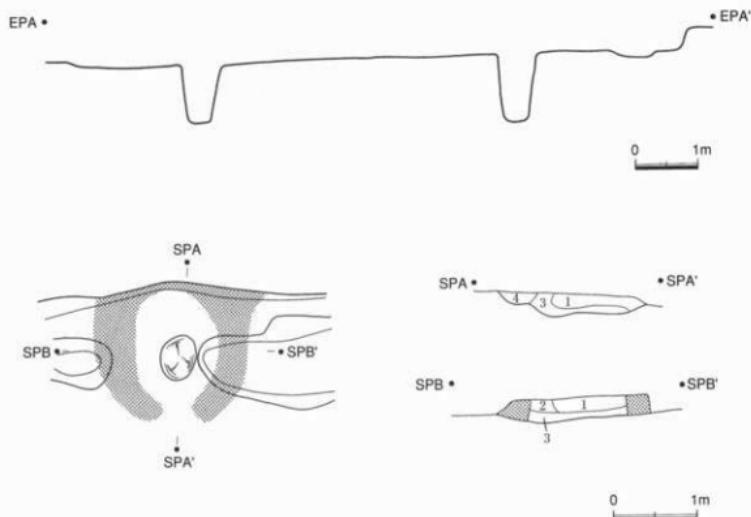
第4図 造構配置図



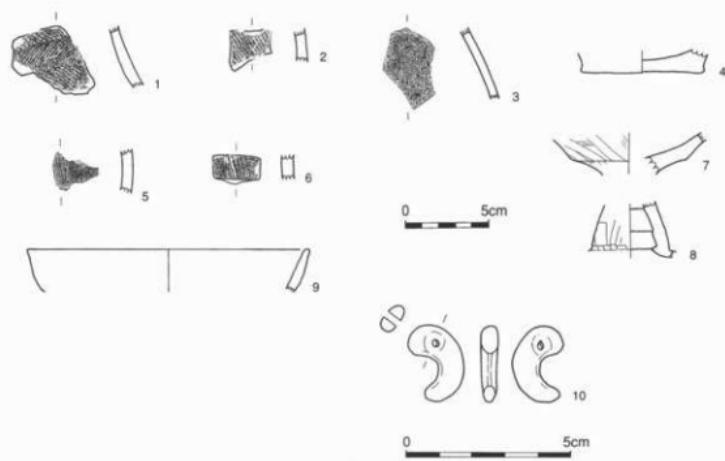
第5図 旧石器時代遺物出土地点・遺物実測図



第6図 001造構実測図(1)



第7図 001遺構実測図(2)



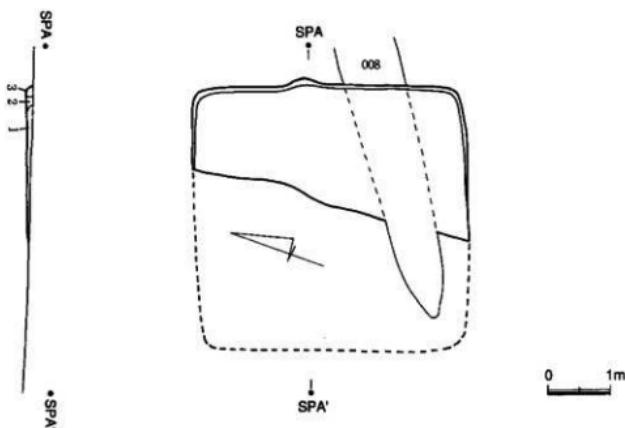
第8図 001遺物実測図

4.6mを測る。柱穴配置から縦長長方形プランが考えられる。竈を備えた壁は直線的に造成され、竈はやや南に偏して作られている。検出された2角は、明瞭な稜をなし、角張っている。周溝は竈を中心に、壁からやや離れて部分的に検出された。竈から北側では短く、北角に達することなく立ち上がる。竈から南側では幅広く掘られ、南東壁の中央で住居跡中央に向かって屈折していた。間仕切りを意図したのか。柱穴は定位位置に4基検出された。中央のやや大きいピットは、住居跡埋没後に掘られたものである。床面はほぼ平坦で、全体にわたってよく固められていた。覆土は第1層中央ピット覆土：第2層暗褐色土層（ローム粒を含む）：第3層暗褐色土層（地山ローム巣乱層）。竈は基部のみが残存し、遺存状態は悪い。煙道は確認できなかった。中央に浅い皿状ピットを穿ち、底部は焼けていた。竈覆土は第1層暗褐色土層（焼土粒を若干含む）：第2層黒色土層（焼土粒・炭化粒を含む）：第3層暗褐色土層（焼土粒を含む）：第4層暗褐色土層（ローム粒を多量に含む）。

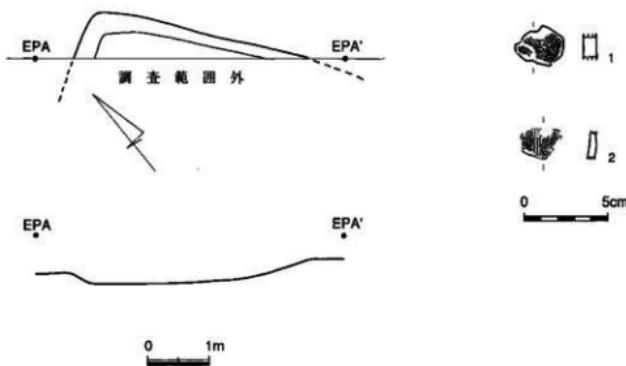
遺物 遺構の覆土がきわめて浅いために、出土層位から遺構に伴う遺物を選別することは、意味をなさない。実際に、複数の時期の遺物が、層序に関わりなく検出されている。この傾向は、今回調査された竪穴住居跡すべてについてあてはまる。1～3は壺形土器である。1は竈南の壁直下から出土した。頸部直下の胴上部破片である。横走する羽状繩文が配されている。撲りはRL-LR-RLの3段で、橙褐色を呈する。2は竈南の凹地内から出土した。1と同部位と思われる。おそらく羽状繩文の一部であろう。撲りはRLである。淡橙褐色を呈する。3は中央ピットから出土した。胴部破片で、表面はハケ目調整されている。胎土は緻密で、赤褐色を呈する。4は底部破片で、外面はヘラナデ、内面はナデ調整が加えられている。復原底径7.4cmで、外面は赤褐色、内面は黒色を呈する。胎土はわずかに石英・長石を含む。5・6は壺形土器の胴部破片である。5は住居跡南部から出土した。口縁直下の部位で、縦方向に鮮明なハケ目が施される。内面は横方向のハケ目調整である。外面は橙褐色、内面は黒色を呈する。6は南部柱穴付近から出土した。外面に縦方向のハケ目が施され、内面はナデされている。外面は黒色、内面は淡橙褐色を呈する。7・8は高環形土器である。7は中央ピットから出土した。杯部最下位破片である。外面はヘラケズリ調整の後に、下端稜部を荒く面取りしている。内面はミガキに近いヘラナデが施されている。外面は淡橙褐色、内面は黒色を呈する。8は間仕切り状の溝中から出土した。比較的小型の脚部破片で、最下位は脚台部と接続している。外面は縦方向にヘラナデ調整し、内面には輪積み痕がほとんど消されることがなく残っている。赤褐色を呈し、胎土にはわずかに石英・長石を含む。9は竈の南間際から出土した。杯形土器の口縁部である。口唇部がわずかに開いている。内外面とも横ナデ調整される。淡橙色を呈し、胎土には雲母・長石を含む。10は滑石製の勾玉で、西柱穴の覆土中から検出された。長さ2.3cmで、0.5cmの厚みがある。2.1gを量る。面取りは丁寧になされ、稜を残すところはなく、全体的に丸みがある。穿孔は直径2mmで、両側からあけられている。穿孔部を中心にして、直径6mmの浅いくぼみが両側に認められる。これは穿孔時の工具痕ではなかろうか。濃緑色を呈し、半透明である。

## 002（第9図、図版3）

遺構 調査範囲のはば中央、001の南東に隣接する。008の廻し穴と切り合っている。東壁に竈を備えていた。1辺約2.1mの小形住居である。遺構確認面から床面まではきわめて浅く、遺存状態は悪い。ほぼ同一レベルで床面を検出したにもかかわらず、西側の半ば以上が削平されており、東側の壁の立ち上がりがわずかに確認されたにとどまった。竈を伴う壁は直線的に造成され、確認できた2角は、丸みを帯



第9図 002遺構実測図



第10図 003遺構・遺物実測図

げている。柱穴・周溝は検出されなかった。床面の状態は、平坦で、あまりしまりがない。竪跡は壁がわずかに突起しており、焼土が残存していた。覆土の構成は第1層暗褐色土層（ローム粒を多く含む）：第2層赤褐色焼土層：第3層黄褐色土層（ローム粒が主体）。第2層の焼土は竪に伴う。遺物は出土しなかった。

#### 003（第10図・図版3・6）

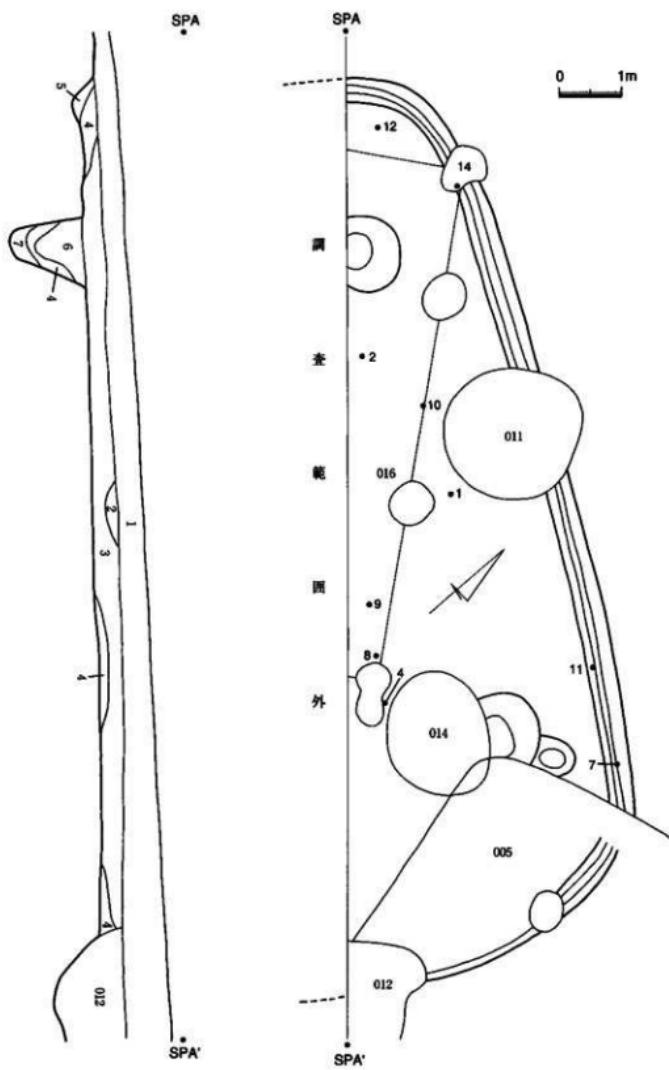
遺構 わずかに北角付近が調査範囲の南西部で確認され、大部分は調査範囲外に属している。遺構確認面から床面までは5cm～10cmと浅い住居跡である。壁は直線的に造成され、北角は明瞭な稜をなして角張っている。周溝は確認できない。床面は緩く傾斜しており、北角付近が最も深い。床面の状態はしまりがない。

遺物 1・2は壺形土器の胴部破片である。両者とも縦方向にハケ目が走っている。1は橙褐色で、ハケ目が細密である。2は器壁が薄く、表面に黒斑が見られる。

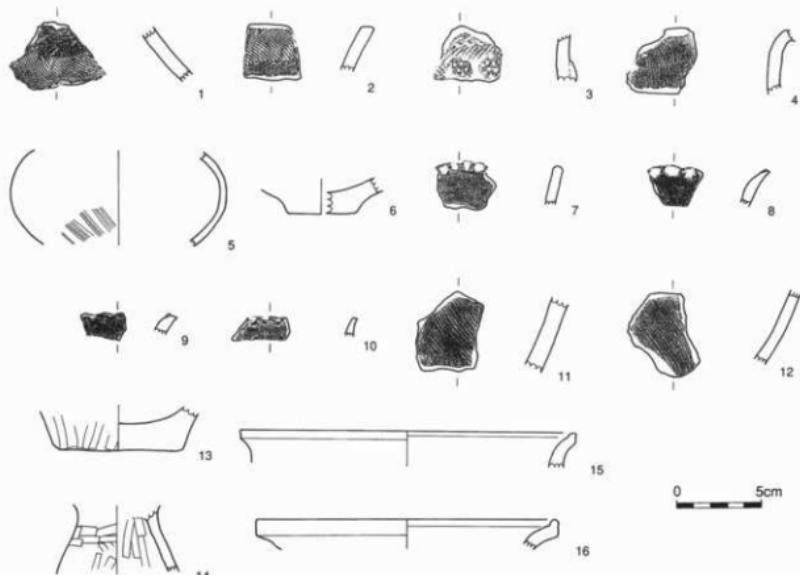
#### 004（第11・12図・図版3・6・7）

遺構 調査範囲の南端部付近に所在する。竪穴住居跡005、掘立柱建物跡016、土坑011・012・014と切り合っており、これらの中で最も古い。4分の1ほどが調査範囲に捕捉され、それ以外は調査範囲外に属している。北東壁は直線的に造成されているが、確認された2角はかなり丸みを帯びている。隅丸プランと考えられ、1辺が6.5m前後と思われる。検出範囲では竪は所在していない。竪ではなく、中央に炉が作られているだろう。周溝はほかの遺構と切り合わないところでは確認できた。005と重なる部分からも一部検出されたので、おそらく全周していると考えられる。床面上には多数の土坑やピットが散在しているが、検出範囲のみでは柱穴に相当するピットは認められない。床面の状態は平坦で、中央寄りは固くしまっている。覆土は第1層表土層：第2層黒色土層（焼土粒・炭化粒を多く含む）：第3層暗褐色土層（ローム小ブロックを含む）：第4層暗黃褐色土層（ローム小ブロックをやや多く含む）：第5層黃褐色土層（地山ローム巣乱層）：第6層黒色土層（ローム小ブロックを含む）：第7層黃褐色土層（ローム粒主体層）。第2層の焼土は床面から浮いており、住居廃絶後に投棄されたものである。

遺物 1～7は壺形土器である。1は遺構検出範囲のはば中央から出土した。頸部へ移行する部位で、RL-LRの羽状繩文が横走している。胎土は精緻で、わずかに雲母を含み、橙褐色を呈する。2は西寄りの調査限界付近から出土した。口縁部破片で、口唇部は単純に整形され、LR-RLの羽状繩文が施される。胎土は緻密で、微細な雲母を含む。外面は赤褐色、内面は黒色を呈する。3は頸部破片である。地文は上位にS字状結節文、下位に羽状繩文が施されている。羽状繩文の上から、円形粘土板が2個貼付され、粘土板上にはそれぞれ中心に1か所、周囲に6か所からなる円形刺突文を形成している。胎土は厚く、肌理は荒い。淡褐色を呈する。4は土坑014と掘立柱建物跡016の柱穴に挟まれた地点から出土した。頸部破片で、2段のハケ目が装飾的に施される。内外面とも赤彩されている。胎土は長石を含み、肌理が荒い。5は壺形土器の胴部中央破片で、底部の小さな、壺形に近い器形となろう。下半部に荒いハケ調整を施した後、ミガキに近いヘラナデを行っている。胎土は精選され、わずかに石英が含まれる。内外面とも黒色を呈する。6は底部破片で、胴部と底部円板との接合部は、指圧で固定した後に、ヘラナデされている。胎土は緻密で、石英をわずかに含み、明褐色を呈する。7～13は壺形土器である。7～10は波状口



第11図 004 遺構実測図



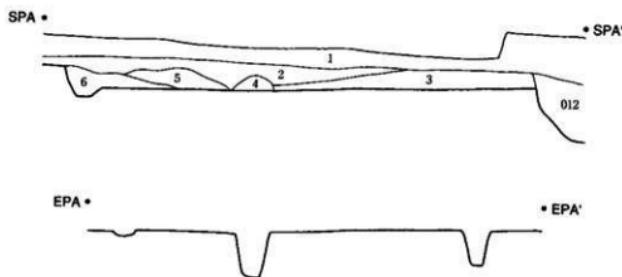
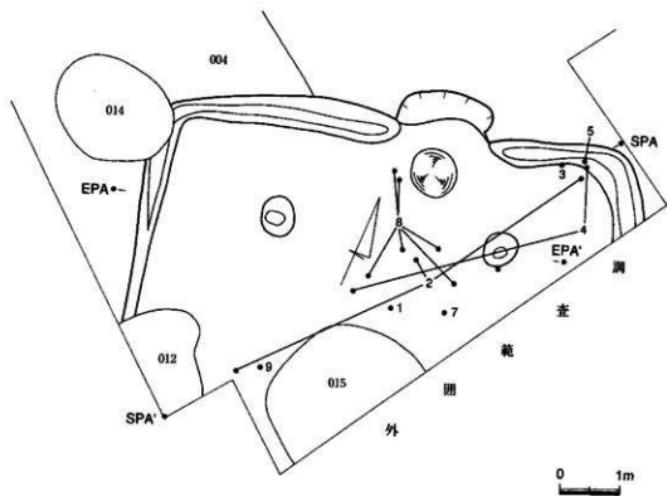
第12図 004 遺物実測図

縁を有する口縁部破片である。7は東角付近の周溝内から出土した。棒状工具の押圧によって口唇部に刻み目を入れている。器壁の厚みは均一で、内外面ともナデ調整が行き届く。胎土は緻密で、明橙褐色を呈する。8は掘立柱建物跡016の柱穴付近から出土した。口唇部内外面から棒状工具を押圧して波状口縁を形成する。口縁は外反し、内面には煤が付着している。胎土は緻密で、砂粒を交える。橙褐色を呈する。9は8の西側から出土した。口唇部内面からの指圧によって、波状口縁を形成している。口唇部直下の内面には、横走するハケ目が認められる。胎土は緻密で、明褐色を呈する。10は土坑011のすぐ南から出土した。口唇部が棒状工具による直上からの押圧によって波状化している。器壁は口唇部に至るほど薄くなる。胎土は精緻で、赤褐色を呈する。11・12は胴部破片である。11は東部周溝内から出土した。ヘラナデの後、斜め方向にハケ目調整されている。内面はナデにより平滑になっている。胎土は砂粒が多く、緻密である。表面は黒色、裏面は淡橙褐色を呈する。12は西隅角から出土した。縦方向の荒いハケ目が施されている。胎土は砂粒が多く、緻密である。内外面とも赤褐色を呈する。13は底部破片で、復原底径7.8 cm、中央の厚みは1.6cmを測る。内外面ともにヘラナデ調整されている。底部外面には煤が付着している。外面は赤褐色、内面は黒色を呈する。14は西部周溝内の掘立柱建物跡016の柱穴にかかる地点から出土した。高環形土器の脚部破片である。杯部との接合部はヘラケズリで厚みを整えた後に、横方向のヘラナデで平滑にしている。内面は縦方向のヘラケズリで調整されている。胎土は精緻で、わずかに石英を含む。外面には黒斑が見られる。15・16は常緑型甕形土器の口縁である。15は短い口縁が横に大きく開き、口唇部が上方につまみ出され、外面には明瞭な稜を形成している。胎土は緻密で、赤褐色を呈する。16は器形は同じであるが、厚みがあり、口唇端も丸くなる。胎土には長石・雲母を含み、暗褐色を呈する。

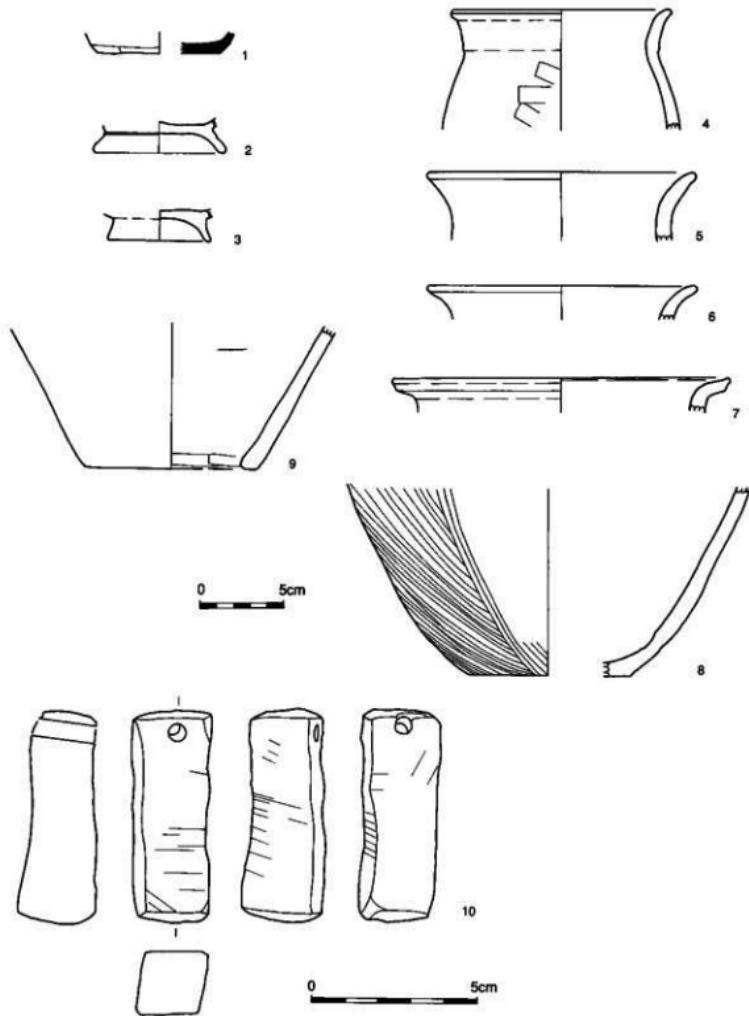
005 (第13・14図、図版4・7・9)

**遺構** 調査範囲の南端に所在し、南側の半分程度が、調査範囲外にでている。竪穴住居跡004、土坑012・014・015と重複している。004を切っているが、土坑群には切られている。これらの新旧関係は、004・005・土坑群の順に新しくなる。北壁のやや東寄りに竈跡が存在した。竈は住居内側に食い込むように掘り込まれているため、北壁の形状は、竈から西では弧状に張り出し、東では斜行して北東角に取り付いている。周溝は西壁南側で途切れている。柱穴は北寄りに2基検出されたが、南側は不明である。床面の状態は中央付近はやや固くしまっているが、周辺部は柔らかい。竈の遺存状態は悪く、構築材の山砂層はほとんど見られなかった。煙道部には、半円形の浅い張り出しピットが掘り込まれている。燃焼部はすり鉢状にくぼみ、表面が赤く焼けていた。覆土は第1層表土層：第2層黒色土層（ローム粒を含む）：第3層暗褐色土層（ローム粒・ローム小ブロックを含む）：第4層暗赤褐色土層（焼土ブロックを含む）：第5層暗黄褐色土層（ローム粒が多く、焼土粒を含む）：第6層暗黄褐色土層（地山ローム微乱層）。第4層・第5層の焼土は床面直上だが、床面の状態は火災を受けた痕跡がないので、廃絶後の投棄であると考えられる。

**遺物** 1は遺構中央付近から出土した。須恵器杯形土器の底部破片である。底部は手持ちヘラケズリされ、体部下端にまで及んでいる。内面はナデ調整されている。小石・長石を含み、青灰色を呈する。2・3は高台付椀形土器の高台部である。2は遺構内のかなり離れた3地点から出土した。高台径7.8cmで、高台は厚みがあり、大きくハの字状に開く。端部は丸みを持っている。底部外面には回転糸切り痕跡を残している。底部内面は黒色処理されている。胎土は精緻で、赤褐色を呈する。3は北東角付近から出土した。高台径6.2cmを測る。高台の開きは小さく、端部は接地面を成形している。底部はナデにより、糸切り痕を消している。胎土は径1mm弱の暗赤褐色夾雜物を多く含む。明橙褐色を呈する。4～8は壺形土器である。4～7は口縁部破片である。4は遺構内の離れた2地点から出土した。復原口径12.7cmを測る。口縁はあまり開かず立ち上がり、口唇部は丸みを持って外反している。胴部はなで肩で、最大径は中位以下にある。器壁は口縁と胴部の接合部が最も厚く、胴部に下がるほど薄くなる。口縁は口唇部直下をヘラケズリした後、横ナデ、胴部は横方向のヘラナデ調整で処理している。口縁内面には煤が均一に付着している。胎土は緻密で、長石を多く含む。外面は暗褐色、内面は赤褐色を呈する。5は北東角の周溝内から出土した。横ナデ調整され、下端は横方向のヘラナデが認められる。口唇部に煤が付着している。胎土は精緻で、橙褐色を呈する。6は緩やかに外反する器形で、口唇部で若干厚みを増す。横ナデ調整されている。胎土は緻密で、暗赤褐色を呈する。7は常総型の壺で、短い口縁が横に大きく開き、さらに口唇部がつまみ上げられる。横ナデ調整されるが、粘土の繼ぎ目がかなり目立っている。内面には煤が付着している。胎土は雲母・長石を含み、明褐色を呈する。8は竈手前の空間から比較的まとまって出土した。胴下半部から底部にかけての破片である。復原底径9.8cmを測る。外面はミガキに近い縱方向のヘラナデで、底部付近は斜め方向になる。内面はナデが施されている。胎土には長石・雲母が含まれる。上半部は明褐色、下半部は赤褐色を呈する。底部外面には木葉压痕が認められる。9は土坑015のすぐ西から出土した。壺形土器の胴下半部である。胴部は直線的にバケツ形に開く。胴下端部内面はわずかに面取りされている。内外面ともヘラナデによって調整される。器壁は胴下端部で若干厚みを増す。外面には大きな黒斑が存在する。胎土は雲母・長石を多く含む。常総型の類型であろう。10は砂岩製砥石である。長さ6.3cm、



第13図 005遺構実測図



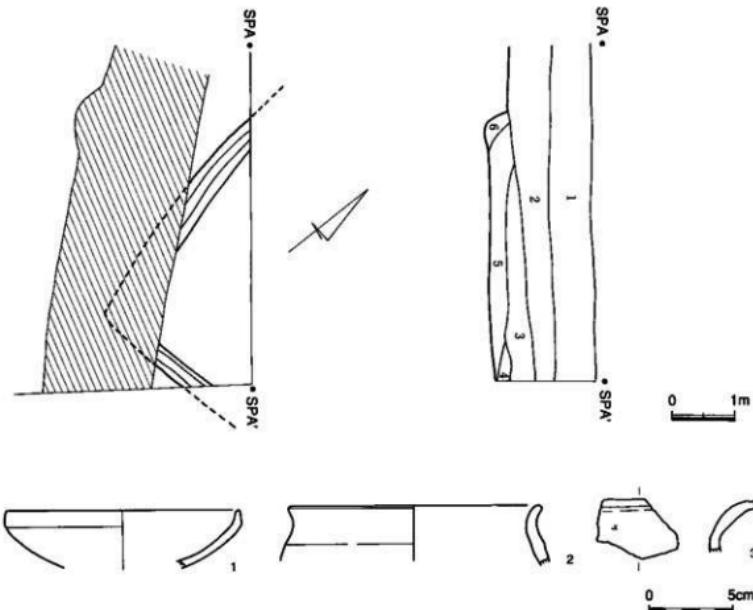
第14図 005遺物実測図

幅・奥行きとも2.4cmで、重量48.7gを量る。直方体の天頂部付近に一孔を穿ち、紐通し孔としている。各面ともかなり摩滅して、表面は平滑である。横方向に併走する浅い線条痕が多数認められる。灰褐色を呈する。

### 013 (第15図・図版4・8)

**遺構** 005の北に所在し、農業用水管に搅乱されていた。大半が調査範囲外に出ている。範囲内に確認されたのは、南西側の一部と考えられる。壁際に周溝がめぐっている。柱穴は確認されなかった。床面の状態は、凹凸があって軟弱である。覆土は第1層表土層：第2層暗褐色土層：第3層暗褐色土層（ローム粒を多く含む）：第4層赤褐色土層（焼土粒を多く含む）：第5層暗黄褐色土層（ローム粒・ローム小ブロックを多く含む）：第6層黄褐色土層（地山ローム微乱層）

**遺物** 1は杯形土器で、浅い体部から短い口縁が直立する扁平な器形となる。口縁と体部の境は明瞭な稜を形成し、口唇部に至る器壁は急激に薄くなる。体部はミガキに近いヘラナデ、口縁は横ナデ調整されている。胎土は緻密で、明茶褐色を呈する。2・3は壺形土器である。2は短頸小形壺で、復原口径15.1cmを測る。口縁は短く、小さく外反している。胴部は肩の張らない器形になる。胴部と口縁の境は、明確な稜を形成する。口唇部は丸くなる。口縁は横ナデ、胴部は横方向にヘラナデされている。胎土は緻密で、茶褐色を呈する。3の口縁部は緩やかに外反し、口唇部は鋭い稜を形成する。横ナデ調整するが、粗雑で、成形時の粘土貼付痕をとどめている。胎土は緻密で、外面は暗褐色、内面は明褐色を呈する。



第15図 013 遺構・遺物実測図

## 第4節 挖立柱建物跡

006 (第16図・図版4)

遺構 調査範囲の南西部に所在し、003の北に位置する。遺構の北東部は調査範囲外に出ている。桁行3間で、柱心間距離5.17mを測る。梁行は2間以上ある。主軸は37°西に傾いている。各柱穴は略円形プランで、直径50cm前後のものが多く、確認面からの深さは20cm~40cmである。柱穴の覆土は第1層黒色土層（ローム粒を含む）：第2層暗褐色土層（ローム粒を含む）：第3層暗黄褐色土層（ローム粒を多く含む）：第4層黄褐色土層（ローム粒充填層、非常に固くしまる）。柱穴覆土は柱の抜き跡がよく残り、裏込めにはロームを含んだ暗褐色土が使用された。遺物は出土しなかった。

016 (第17図・図版8)

遺構 竪穴住居跡004を切っている。004の床面が遺構確認面となった。桁行3間の掘立柱建物跡を構成すると思われる。遺構の大半は調査範囲外に出ている。P1-P4から西方に屈折して調査範囲外に梁行が伸びている。主軸は37°西に傾いており、006と等しい。桁行長は柱心間距離で4.10mを測る。P1-P2間の距離はやや短い。P4には建替え跡が見られる。各柱穴は略円形プランで、直径30cm前後、深さ10cm~20cmを測る。

遺物 いずれも本遺構の周辺から出土した。遺物の年代が諸他の遺構のものとは大きくずれているので、本遺構に伴ったものとみなしうる。1・2はカワラケである。1は口径10.0cm、底径4.3cm、器高3.1cmを測る。体部はS字状に大きく開き、口縁で厚みを増す。底部は回転糸切り後無調整で、体部との接合部で、底部円板がはみ出たままになっている。外面は横ナデ、内面はナデにより仕上げられている。胎土は精緻で、橙褐色を呈する。2は口径9.9cm、底径4.2cm、器高2.1cmを測る。器形は1とほぼ同様だが、開き方はやや小さい。底部も回転糸切り後無調整で、底部円板がはみ出ている。外面は横ナデ、内面はナデによって調整される。胎土は緻密で、褐色を呈する。3は硬質砂岩製の石造品の一部を再利用した砥石である。再利用した部位は、本来の石造品の基部に相当すると思われる。長さ4.8cm、最大幅6.8cm、厚さ1.5cmで、80.4gを量る。周縁部の摩滅が著しい。明灰色を呈する。

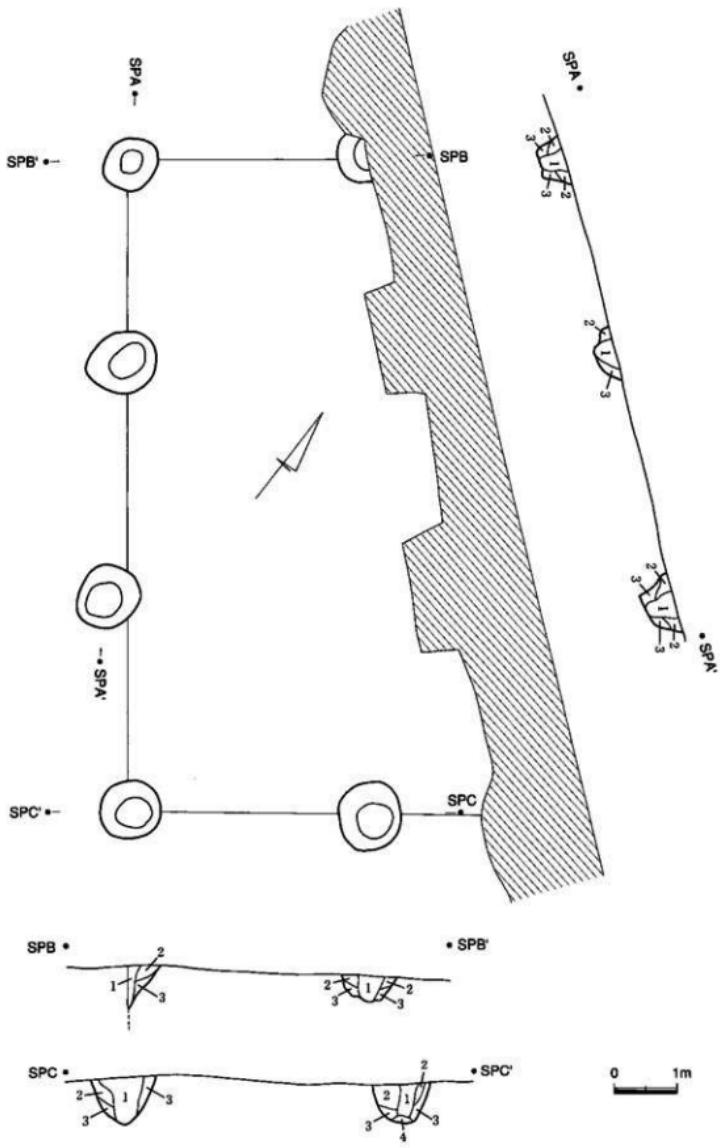
## 第5節 陥し穴

008 (第18図・図版5)

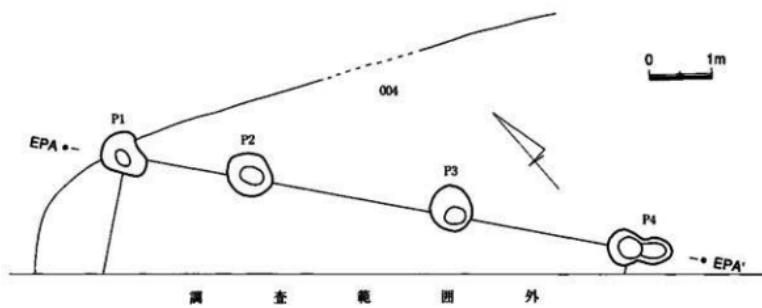
遺構 008・009・010の陥し穴群は、いずれも長楕円形を呈し、主軸方向を等しくして、ほぼ等間隔で並列している。008は西側で竪穴住居跡002に切られている。長さ3.60m、最大幅0.48m、深さ0.89mを測る。覆土の構成は第1層暗褐色土層（ローム粒を含む）：第2層黄褐色土層（ローム粒主体層）：第3層明黄褐色土層（ローム小ブロック充填層）：第4層暗黄褐色土層（ローム粒を多く含む）。掘られてまもなく、ローム土で完全に埋められたことを示している。遺物は出土しなかった。

009 (第19図・図版5)

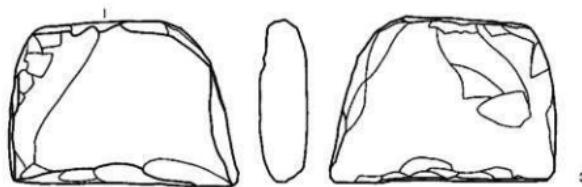
遺構 3基の陥し穴群の中央に位置する。遺構の西端付近が調査範囲外に出ている。確認長3.42m、最大幅0.54m、深さ0.93mを測る。覆土の構成は第1層暗黄褐色土層（汚れたローム粒を多く含む）：第2層黄褐色土層（ローム粒充填層）：第3層暗褐色土層（ローム粒が少ない）：第4層明褐色土層（汚れたロ



第16図 006 遺構実測図

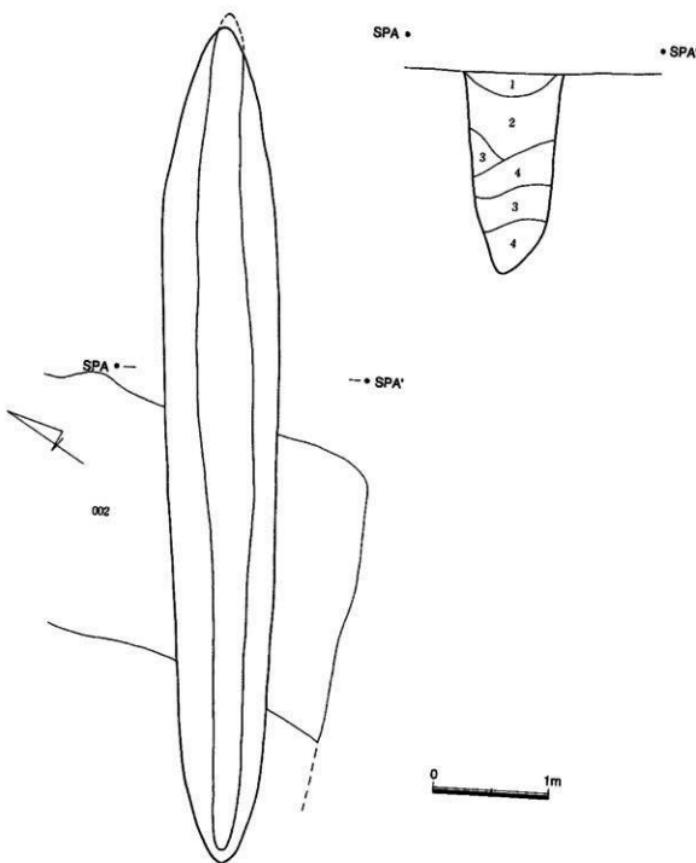


0 5cm

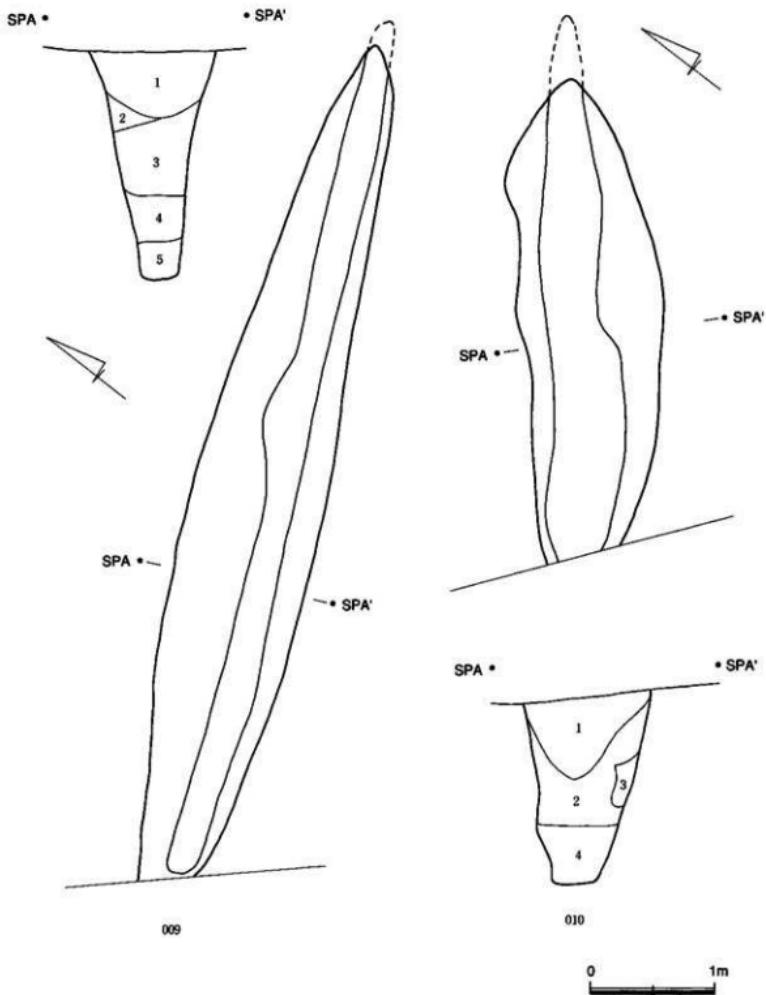


0 5cm

第17図 016遺構・遺物実測図



第18図 008遺構実測図



第19図 009・010遺構実測図

ーム小ブロック主体層、しまりなく柔らかい) : 第5層(汚れたローム小ブロック主体層、固くしまる)。ローム粒主体の覆土で、人為的に埋められたことを示している。遺物は出土しなかった。

#### 010 (第19図・図版5)

遺構 3基の陥し穴群の最も南に位置する。西側の半ば以上が調査範囲外に出ている。確認長1.90m、最大幅0.60m、深さ0.76mを測る。底部東端は確認面よりも0.25mえぐり込まれている。覆土の構成は第1層暗黄褐色土層(汚れたローム粒を多く含む) : 第2層暗褐色土層(ローム粒を含む) : 第3層黄褐色土層(ローム粒充填層) : 第4層黒色土層。最下層に黒色土が入り込み、掘られてからしばらくは放置され(使用され)、その後埋められたことを示している。遺物は出土しなかった。

### 第6節 土坑

#### 007 (第20・22図)

遺構 陥し穴009の北西に所在する。最大径1.32m、深さ0.63mを測る円形プランの土坑である。底面は平坦で、壁は下半部が若干袋状に張り出している。覆土の構成は第1層黒色土層(焼土粒を含む) : 第2層赤褐色焼土塊 : 第3層暗褐色土層(焼土粒を含む) : 第4層暗黄褐色土層(ローム粒を多く含む) : 第5層黄褐色土層(ローム粒主体層)。この状態から掘られてまもなくローム系土で、さらに焼土混入土で、2度にわたって人為的に埋められたことが知られる。

遺物 1は杯形土器の底部破片である。底部は回転糸切り後、調整されず、体部下端は手持ちヘラケズリされている。内面はロクロ成形時の凹凸がよく残り、ナデ調整されている。胎土は長石を多く含み、気孔が目立つ。暗赤褐色を呈する。

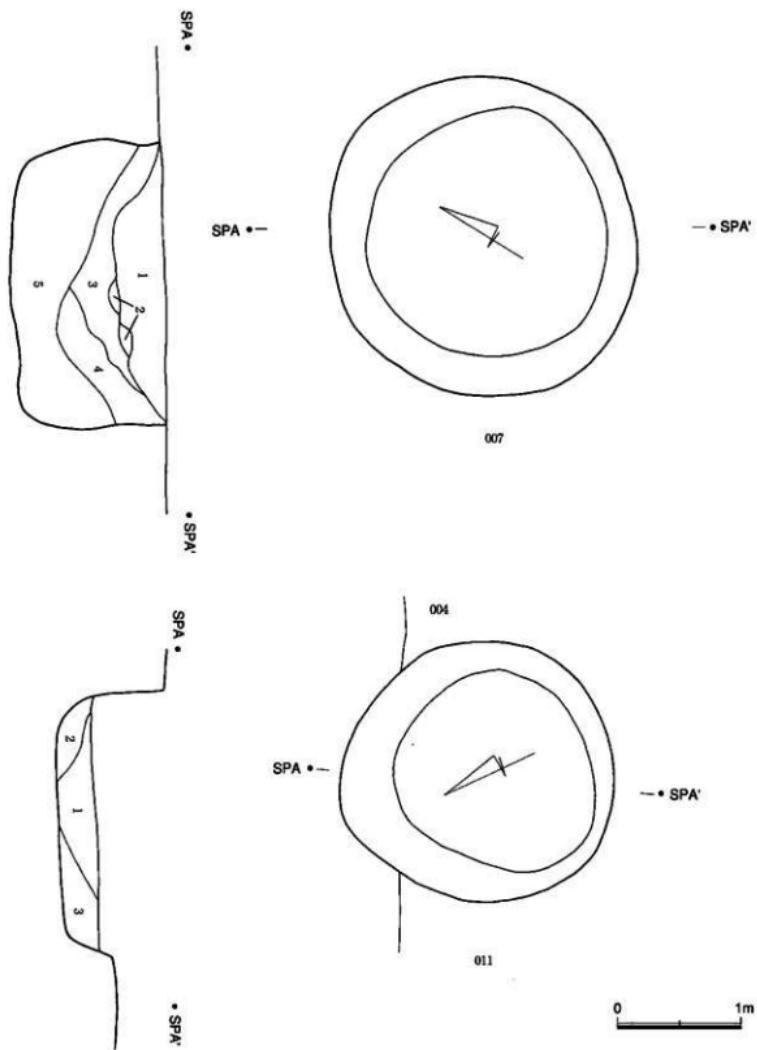
#### 011 (第20・22図、図版8)

遺構 壺穴住居跡004を切っている。最大径1.10m、深さ0.44mを測る略円形プランの土坑である。底面は平坦で、壁はあまり開かず立ち上がる。遺構下半部の覆土は第1層暗黄褐色土層(ローム粒を多く含む) : 第2層黄褐色土層(ローム粒主体層) : 第3層黒色土層。この遺構もローム系土で人為的に埋められている。

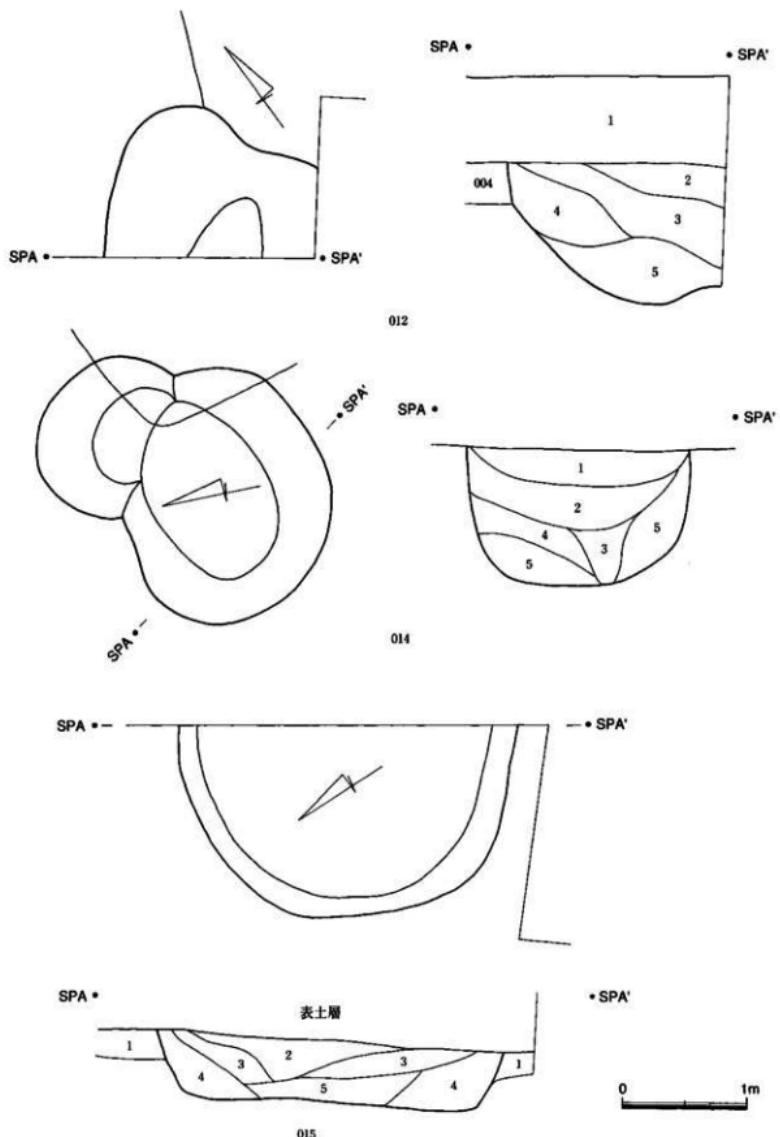
遺物 1は壺形土器の口縁部破片である。常総型壺の頸部から横に大きく開いた部位で、欠損する口唇部は短く直立する形態となろう。胎土には調整・石英を多く含む。明褐色を呈する。

#### 012 (第21図)

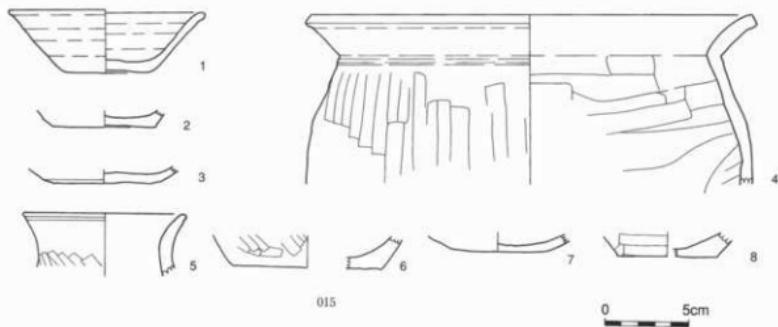
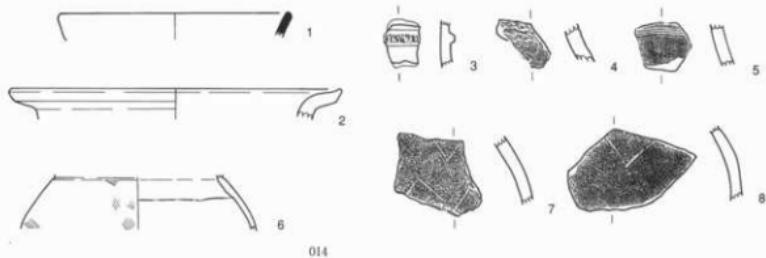
遺構 調査範囲南西端に所在し、壺穴住居跡004・005を切っている。不整形プランを呈し、半ば以上は調査範囲外に出ている。底面は狭く、壁は大きく開いている。確認範囲での深さは0.58mを測る。覆土は第1層表土層 : 第2層暗褐色土層 : 第3層暗黄褐色土層(ローム粒を多く含む) : 第4層暗黄褐色土層(ローム粒を多く含み、炭化粒が混じる) : 第5層黄褐色土層(ローム粒主体層)。この状態から、ローム系土で大半が埋められたことが知られる。遺物は出土しなかった。



第20図 土坑実測図（1）



第21図 土坑実測図（2）



第22図 土坑出土遺物実測図



第23図 グリッド出土遺物実測図

#### 014 (第21・22図・図版8)

遺構 012の北西に所在し、竪穴住居跡004・005を切っている。大小2つの土坑が切り合った状態を呈する。長軸1.22mで、大小底面の004床面からの深さは、それぞれ0.56m、0.61mを測る。底面はややくぼみ、壁の開きは小さい。覆土構成は第1層暗褐色土層：第2層暗褐色土層（ローム粒を含む）：第3層暗褐色土層（第2層の漸移層で、ローム粒が多くなる）：第4層黒色土層（ローム粒を含む）：第5層黄褐色土層（ローム粒主体層）。この状態から、掘られてまもなく不十分に埋められたことが知られる。

遺物 本遺構出土遺物には、竪穴住居跡004に属した遺物が混入している。1は須恵器杯形土器の口縁部である。内外面ともロクロナデ調整されている。胎土は精緻で、明灰色を呈する。2は常縫型壺形土器の口縁部である。短い口縁が横に大きく開き、口唇部は上方につまみ出される。胎土には長石を多く含み、赤褐色を呈する。3～8は壺形土器である。3～5は頸部である。3は刻み目を有する突帯が貼付されている。赤褐色を呈する。4はS字状結節文をめぐらせている。橙褐色を呈する。5は下端部に櫛描線文が横走する。器面は縱方向にヘラミガキが行き届いている。胎土は緻密で、わずかに雲母を含む。表面は赤褐色、裏面は黒色を呈する。6～8は胴部である。6は口縁に接続する部位で、口縁直下に1条の沈線がめぐっている。器面は粗雑なハケ調整の後、ミガキに近いナデで仕上げられている。内面は輪積み痕を明瞭に残す。器壁は薄く、胎土は緻密で、茶褐色を呈し、毎面は黒色化している。7・8は胴部破片である。いずれも鋸歯文と思われる区画沈線の内部に、細繩文を施している。胎土はいずれも緻密で、スコリアを含み、暗赤褐色を呈する。同一個体の可能性がある。

#### 015 (第21・22図・図版8・9)

遺構 012の東に隣接し、005を切っている。略円形プランを呈し、半ばほどが調査範囲外に出ている。直径1.35m、確認面からの深さ0.28mを測る。底面は平坦である。覆土は第1層004覆土：第2層暗褐色土層（炭化粒を多く含む）：第3層暗黄褐色土層（ローム粒を多く含む）：第4層黄褐色土層（ローム粒主体層）：第5層暗褐色土層（ローム粒を含む）。以上から、不十分に埋められたことが知られる。

遺物 竪穴住居跡005の遺物が混入していると思われる。1～3は杯形土器である。1は口径11.7cm、器高3.7cmを測る。小さい底部から体部が大きく開き、口唇部は丸くふくらんで、わずかに外反している。体部外面はロクロ成形時の凹凸を残している。内外面とも横ナデ調整されている。底部は回転糸切り後、不完全なナデを施している。胎土は緻密で、スコリアをわずかに含み、明橙褐色を呈する。大きな黒斑がある。2は底部に回転糸切り痕を残し、周縁の一部をわずかにヘラケズリしている。体部は輪積み成形後の調整が粗雑で、底部円板との接合部に粘土貼付痕をとどめている。底部内面はロクロ成形時の凹凸を明瞭に残している。胎土には砂粒を含む。明褐色を呈する。3は底部は回転糸切りで、体部との境はヘラケズリされている。内面はナデ調整されている。胎土には小石・スコリアが含まれる。明褐色を呈する。4～8は壺形土器である。4は口縁から胴部にかけての部位で、復原口径26.3cm、最大径26.6cmを測る。口縁は頸部からくの字状に直線的に屈折し、口唇部は強い横ナデによって、明瞭な棱を形成している。口縁部と胴部との接合部には、ヘラを押しなでて処理したため、圧痕を生じている。口縁は横ナデ、胴部はヘラケズリの後、弱くヘラナデされている。胎土は緻密で、砂粒・石英を含む。淡い橙褐色を呈し、内面には黒斑があり、外面には煤が付着している。5は小形壺の口縁で、とくに頸部を形成せず、口縁があまり

開かずに、緩やかに外反する器形となる。口唇部直下に1条の沈線が横走している。胴部上端にはヘラケズリが認められる。胎土は緻密で、赤褐色を呈する。6～8は底部破片である。6は常縦型壺で、底部は粗雑にヘラナデされ、胴部下端はヘラケズリされている。胎土には長石・雲母を多く含み、茶褐色を呈する。7は復原底径5.6cmを測り、胴部下端から底部を持ちヘラケズリしている。内面調整はナデによる。器壁は薄く、胎土は緻密で、長石・雲母を含む。外面は明褐色、内面は暗褐色を呈する。8は復原底径5.8cmを測る。調整法は12に等しい。胎土は緻密で、雲母を含む。橙褐色を呈する。

## 第7節 グリッド出土遺物（第23図、図版9）

すべて9Cから出土した。1は杯形土器で、体部上端に稜をつくりて口縁が外傾する。体部はヘラケズリされ、口縁は横ナデで調整される。内面は細い工具によって、ミガキに近いヘラナデが加えられる。内面全体と口縁外面には均質に煤が付着している。2は杯形土器上半部で、体部上端に稜をつくり、短い口縁が立ち上がる。体部はヘラナデ、口縁は横ナデされている。胎土は緻密で、明橙褐色を呈する。模倣杯末期の遺物である。3は壺形土器の口縁部破片である。口縁は緩やかに外反し、口唇部が鋭く内屈する特徴的な器形である。内外面とも横ナデ調整が施される。胎土は精緻で、明橙褐色を呈する。

## 第3章 まとめ

今回の発掘調査によって検出された諸遺構（とくに竪穴住居跡）と、そこから出土した遺物（土器片）との関係は、必ずしも判然としないところがある。そのために、出土遺物を羅列的に報告しただけでは、その遺構の年代観が明確に伝達されないかもしれない。それは第一に、本遺跡が複合遺跡であり、さまざまな時代の遺物が共存していること。第二に、竪穴住居跡の床面が浅いため、ゴボウ栽培のトレンチャーによって、すべての土器が裁断されてしまったことなどが原因にあげられる。そこで、あらためて各遺構の時期について述べておこう。

竪穴住居跡は6軒検出された。001は遺物だけから判断すれば弥生時代になってしまうが、竪を伴う住居跡なのでもっと新しくなり、土師器杯形土器（9）が本来所属する遺物であろう。おおよそ奈良時代とみなせる。002は遺物が出土しなかったが、竪を伴っていること、規模が小さいことなどから、奈良～平安時代に属するであろう。003は調査範囲が狭く、わずかに土器小片が出土したにとどまるので、時期の判断は保留せざるをえない。004は遺構プランが隅丸方形になることが大きな要素で、羽状縄文やハケ目文の土器が本来の遺物であろう。弥生時代末期と思われる。005は高台付楕円形土器（2・3）がメルクマールとなり、9世紀後葉～10世紀前葉と考えられる。013は狭い範囲しか調査できなかったが、出土土器から判断すれば、7世紀中葉になる。

掘立柱建物跡は2棟検出された。006と016は主軸方向を等しくするので、同時期に建造されたとみてよい。016付近からはカワラケ（1・2）が出土しており、15～16世紀の所産である。

陥し穴は3基検出された。主軸方向を等しくするので、同時期に掘られたものであろう。遺物が出土しないので時期判断は困難だが、諸他の調査例から推して縄文時代としておく。

土坑は5基検出された。プラン・規模とも似通っているので、時期は接近していると思われる。015は005を切っているので、それよりも新しい。その015は土坑中最も充実した資料を出土したが、005の遺物が混在しているおそれがある。ほかの土坑からは後出的な常総型の変形土器が出土しているので、土坑類は絶じて10世紀前葉の年代が妥当するとみなされる。

本遺跡は従前の現地踏査で、縄文時代（早期・中期）・古墳時代・平安時代の遺物が発見されていたが、今回の調査によって、さらに弥生時代・奈良時代・中世の遺構の新知見が加わった。

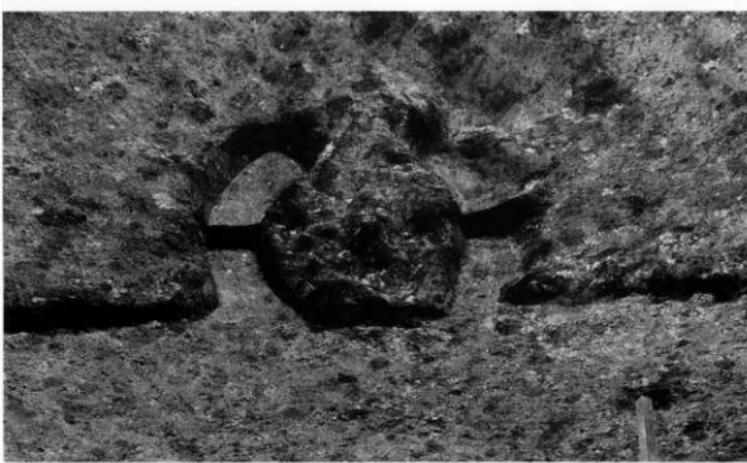
# 写 真 図 版



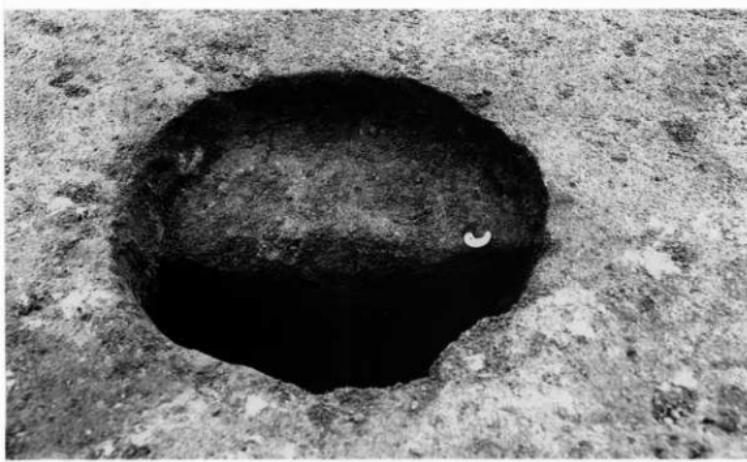
遺跡全景



001



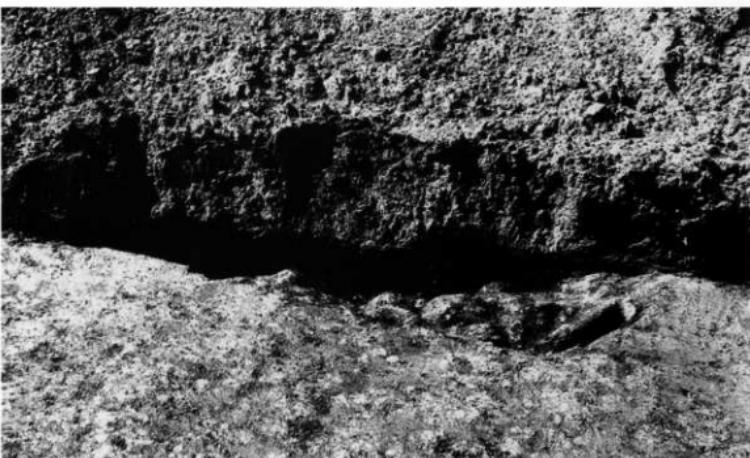
001 玉



001 勾玉出土状況



002



003



004



005



013



006



008



009



010

図版6



001-1



001-7



004-2



001-2



001-8



004-3



001-3



001-9



004-4



001-4



003-1



004-5



001-5



003-2



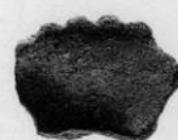
004-6



001-6



004-1



004-7



004-8



004-14



005-4



004-9



004-15



005-5



004-10



004-16



005-6



004-11



005-1



005-7



004-12



005-2



005-8



004-13

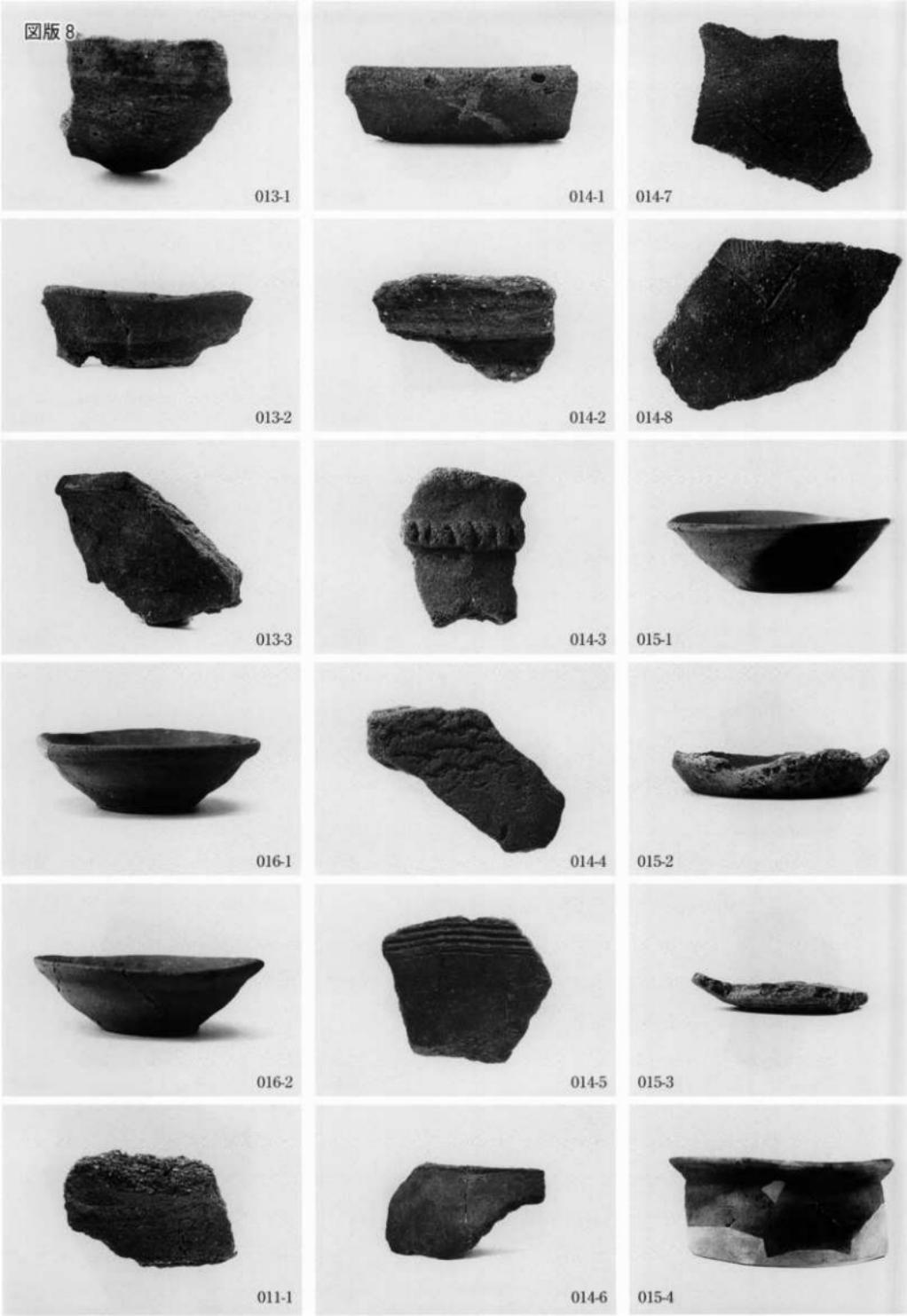


005-3



005-9

図版8





015-5



9C-3



015-6



旧石器-1



015-7



001-10



9C-2



055-10



016-3

## 報告書抄録

ふりがな	さくらしはとりそとかいどういせき							
書名	佐倉市羽鳥外海道遺跡							
副書名	佐倉・羽鳥地先安定給水連絡管工事に伴う埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第441集							
編著者名	兩宮龍太郎							
福集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2							
発行年月日	西暦2003年3月25日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °			
羽鳥外海道	佐倉市羽鳥 957-3ほか	2 1 2	0 4 1	35度 42分 11秒	140度 12分 4秒	19980901 ~ 19980930	3000	送水管建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
羽鳥外海道	集落	旧石器 縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良平安時代 中世	豎穴住居 掘立柱建物跡 陥し穴 土坑	6軒 2棟 3基 5基	フレーク 弥生土器 土師器・須恵器 勾玉 砥石			

千葉県文化財センター調査報告第441集

## 佐倉市羽鳥外海道遺跡

－佐倉・羽鳥地先安定給水連絡管工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－

---

平成15年3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡809-2

発 行 千葉県企業庁  
千葉市中央区市場町1-1  
財団法人 千葉県文化財センター

印 刷 株式会社みづわ  
千葉市美浜区新港213-5

---